
真・恋姫†無双 ～縛られた完遂者～

× ×

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双 　↳縛られた完遂者↳

【Nコード】

N7067L

【作者名】

××

【あらすじ】

家族を殺され復讐に燃える主人公は力をつけ、とうとう仇を殺した、復讐を終えやることもなくなったただ何もしない生活が続いていたしかし、ある日車に引かれそうな少年を助け事故に巻き込まれ死んでしまう

死後何故か趣味がエロゲーの駄神に拾われ、そのまま地獄に行ったかのようにしごかれ、異世界に飛ばれされた

そして飛ばされた先は真・恋姫十無双の世界だった！！

よくある話です

読んでくれたら嬉しいなあ〜なんていってみる
ってか見てください

ぶるるーぐ

何も無い荒野に、大きなクレータが存在し、その中心には、黒い髪を無造作に伸ばした青年がいた

青年の格好は、四肢に鎖のついた枷をつけ、うす汚れた黒いコートとうす汚れた黒いズボンを身につけていた

青年は地べたに胡座をかき、ずっと上を向いて何か考え事をしていた

不意に青年はため息をつき言った

「あのクソガキいつか殴る、必ず殴る」

そしてまた青年は再びため息をついて、空を見上げ、思考を始めた

ここに自分を送り付けた神様をどうやって殴るかを

一話・殴らせる(前書き)

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです。
まだ恋姫のキャラとの絡みはありません

ああまあいじめないで下さい

誤字脱字の報告をお願いします

一話：殴らせる

関口雅人は幸せな家庭に生まれた。

父は大物の政治家でお金には何も不自由なく日々を過ごし、極々普通に16歳になり普通に高校生となった。

ある日友達と遊び遅くに家に帰ると、家族が殺されていた。目の前にいる額にバツテン傷のある男によって

「うわあああああ」

「ああん？誰だてめえ」

「どっ……どうして……」

「ああこの家のガキか」

男はそういうと雅人の家族を殺し血に濡れたナイフを雅人に向けた。

「お前も死んどくか？」

「うおおおーっ！！」

雅人は目の前の男に殴りかかった。しかし、拳を止められそのまま顔を殴り飛ばされ、壁にたたき付けられ、床に転がった。

「ああうざっ」

「うぐっ」

「おっまだ意識があんのか……くっくっくっ」

雅人は笑い出した男に殺意の籠った獣のような視線を向けた。

「いい目だ。こういうガキに会いたかつたんだよ。」

「お前っ！！」

雅人は立ち上がるうとしたが足がふらつき立ち上がれなかった。

「無理すんなよ。面白そうだからお前は生かしておいてやるよ。いやあくだらない汚職政治家の家族皆殺しなんてつまらない仕事だから蹴ろつかと思ってたらいいもん見つけたわ。」

雅人は愕然とした、父が汚職していたということに……
「嘘だっ！！父さんが汚職だなんてっ！！」

「ひぐらしきどりか？くつくつくつ人間生きてりやあ悪いことなんざいくらだつてするさ、俺は今回汚職によって追い詰められた人々から頼まれ悪を倒した正義のミカタってわけだ」

「殺すっ！！」

「まあ焦るなよ。お前が本当に俺を殺すつもりなら追ってこい。強くなつてな。」

そう言つて男は去つていった。

雅人はそれを見届けるかのように気を失つた。

そして、雅人は復讐者となつた。

バツテン傷のある男と家族を殺すよう依頼した奴を殺すため彼は高校を辞め、身を落とすし、ヤクザやマフィアに取り入り、情報を集め、力を付けはじめた。

全ては復讐するために……………

殺し屋に弟子入りし、自分の殺しの腕を極め続けた。

まだ足りない。まだ足りない。まだ足りない。

何かに取り憑かれたかのごとくただひたすらに自分の腕を鍛え続けた。

復讐を成し遂げるためにただひたすら殺し続けた。

まだ足りない。まだ足りない。まだ足りない。

何をしても、アイツに追いつけた気がしない、どれだけ鍛えても、
どれだけ殺しても、どれだけ傷ついても……………
雅人は自称を僕から俺へと変えた。
それは弱い自分を捨てた証だった。
人を殺すための覚悟だった。

そうして8年が経ち

ようやく雅人は復讐を遂げた。

しかし、復讐を終えた雅人には何もなかった。
することもなくただひたすら、生きていた。

7

俺は何をすればいいのだろうか……………いや、もう僕で
いいのか……………
もう俺は必要ないな、昔の口調と性格に戻して行こう。
上を見ながら、昔を振り返りトボトボと道を歩いていた。

すると公園から小さな男の子がボールを追いかけて道路に飛び出して
きた。

危ないなと内心思い、ふと見ると男の子は速く動いているトラック
の目の前にいた。

「くっ」

僕は何も考えずに走り出し少年を押しつけた。

そして……………ミンチにされたorz

なんか人を殺しまくってにおいて最期に人助けで死ぬとか爆笑もんだ
った。

「ブツハハハハ」

ってか爆笑されていた。

トラックに轢かれ、目が覚めるとミンチになったミーの身体の上
にいた。

俗にいう幽霊とか言うやつらしい、で気がついたら隣に金髪碧眼に
白いワンピースの幼女がいて、僕のミンチをみて爆笑していた。

「君は誰？」

「私は であり であり でもなく でもないものっ!!」

壁面みたいな胸を張ってそう言い放った。

「誰が壁じゃっ!!このピー」

「地の文読むなよっ!!」

ってかピーって流せないようなこと言うなよ

「神様だからオールオツケーなんだっ!!」

神様ねえ……………この壁幼女が

「壁言うなっ!!オージービーフに売るぞミンチ」

止めなさい訴えられます。

「神様だから問題なしっ!!」

「はあ……………で神様(笑)」

「何の御用で？」

「うむ……なんか付属されている気がするがそこは無視してやろう」

偉そうだな……

「偉いのだ」

「はいはいで？」

「うむ。人を殺しまくり意味のない復讐を終えた貴様は本来地獄行きのはずであった」
もうなんでもいいよ。

「しかし最期に子供を命懸けで助けるといふ善行をしたので、願いを一つだけ聞いてやることにした。そういうことじゃ」

「ふ〜ん」

正直どうでもよかった。まあでもやっぱりあれかな。

「なんでもいいの？」

「良いぞ、我は神だからなっ！！」

「なら……殴らせる。」

神様をぶん殴りたかった。思いつ切りなぐりたかった。「二言はな
いだろ？」

幼女は肩を震わせていた。怒ったのか？

「ブツハハハハ・くっふ……殴らせるって……殴らせるなんて……お前さん最高じゃな」

なんか褒められた。

「普通なら生き返らせるとかなのに……くっくっくっ殴らせるとは恐れ入る」

おお生き返るか……考えつかなかった。

「良かろう。殴らせてやろう。しかし、我は神。生憎そう簡単に人間に殴らるわけにはいかない」

「だったら……」

「だから勝負じゃ」

「はあ？」

「今から一万回だけチャンスをやろう。その間に殴ればお前さんの勝ちじゃ」

「殴れなかつたら？」

「それはそれでおしまいじゃ」

「なんか理不尽じゃね？」

「それが人生じゃ」

うぎっ・・・んじゃあ

「さあて・・・」「死ねえっクソガキっ！！」・・・やはりきたかつ

！！甘いわっ！！」

僕はクソガキに殴りかかった。すると少女は手の平を上から下に振り下ろした。

その瞬間、僕は地面に叩きつけられた。

「ぐはっ」

「神に殴りかかるとわ。」

「くった・・・ばれ・・・」

僕は意識を手放した。

その後、僕は少女の家とかいうところにつれていかれた。

何故か昔の僕の家で軽く昔のことを思いだし鬱になった。

少女は妹の部屋でエロゲーをやりまくっていた。かなり不快な気持ちになったのは、しょうがないだろう。まあすぐに殴りかかり、また叩きつけられた。

車庫には、車じゃなくてなんかガラクタが散乱していた。少女曰く、神の宝らしい・・・どうみてもガラクタだろ。

まあ何個か便利なのは、パクったけど・・・

ここでは時間が止まっているらしく、僕が死んだ時から一秒も時間が経ってないらしい

まあどうでもいいけど

そしてその後も勝負は続いた。

1000回目に、戦い方を教えられ

2000回目に、武の志を教えられ

3000回目に、生きていくための知識を教えられ

4000回目に、エロゲーをやらされ

5000回目に、宝から武器を与えられ

6000回目に、武器の上手な使い方を教えられ

7000回目に、神の服に掠らせることが出来た。

8000回目に、全ての武器の大まかな使い方を教えられ

9000回目に、爆砕点穴を教えられ

2個程おかしいのがあった気がするが気のせいだろう……
爆砕点穴とか……らん

そして9999回目が失敗に終わり、何故か鎖に繋がった枷で四肢を繋がれ、吊されていた。あるえ？「これはどういうことだ。平面女」

「んだと短小。削るぞ」

何を！？

一応女の子がそういうこと言っちゃいけません

「であと一回しかないわけなんじゃが……諦めるか？」

「はっんなわけねえだろ。クソガキ」

「くふつ大いに結構。なら少しやって欲しいことがある」

「ああ？なんだ？」

「それは……のう」

「どんっ！！ばきっん

繋がれた状態で口に何かを挿込まれ、吹き飛ばされ、鎖は契れた。

……つてかまだ飛んでる！？

「救ってこい」

口に挿込まれたものを飲み込んでしまった。

「何を!？」

「いいから救ってこい……ついでに救われるんだな」
後半聞こえねえよ平面女

急激に光が満ち溢れ僕の視界を奪った。

そして僕は意識を失った。

気絶しすぎじゃね？

そして気がつくと、何もない荒野に一人胡座をかいて座っていた。

ここどこやねん!？

辺りを見回していると不意に頭痛がした。急激にこの世界の情報が
脳みそに送り込まれてきた。
うお超痛いつ!!

漢王朝だとか霊帝だとか真名だとか

ぎゃあああ死ねる、まじで死ねる。

いや無理まじ無理

そして次は全身に激痛が走った。筋肉がバラバラにされるようなそ
んな痛みが……

あつ……また……痛みで……意識が……

そんな中、最後に見たのは青い髪のロンギ スミtainな槍をもった女の子と黒髪で眼鏡をかけた女の子と頭に変な人形を乗せた金髪の女の子だった。

???

「やれやれ流星が墜ちたのを見に来たら人間だとはな」

「どうしますか？」

「拾ってましよう〜面白そうですし〜」

「どうみても怪しいじゃないですか、反対です」

「いいではないか稟。妖なら殺してしまえばいいのだから」

「はぁ・・・まったく星といい風といい」

「ふふ本当に面白そうなお兄さんです〜」

二話・真剣で私と・・・・・・・・（前書き）

連続投稿なのだっ!!!

手が痛いのだっ!!!

漢字が出てこないのだっ!!!

名前がわからなくなるのだっ!!!

すみません調子に乗りました。

二話：真剣で私と・・・・・・・・

気を失うのは何度目なんでしょうか？今は亡き母上様
これも全てのあの駄神のせいには違いありません。

待っていて下さい。

必ず雅人はあのペチャパイというか、パイナシ駄神を必ず殴ってみ
せます。

そう亡くなった両親に誓い、目を覚ました。

おお、知らない天井じゃん、来たよコレは・・・・・・・・はあくだら
ないこと考えてないで情報の整理をしよう。

そつえば助けしてくれた人ありがとうございます。

んで本題つと

まず大事なのが、この世界が真・恋姫十無双の世界だって事だな。
原作やらされた記憶があるけど、細かい点まで覚えてないし、三国
志の知識もあやふやだし・・・・・・・・アレ？嘘なにコレどう
しようコレ

どこどこにあんの？

あれか？

バタバタバツタン

おおまさかこの世界でこれとは・・・・・・・・神様愛してる。

ガチャ

誰かが部屋に入って来たみたいだ

「おや、あの御仁がいなくなっておりますな
助けてくれた人だな

「あっこつちです」

「ふむ、そちらにいらつしやったのですか」

「ええすいません。こんなところから」

「いえお気になさらずに」

おおいい人みたいだ。久しぶりにあのパイナシ以外と喋れてなんか嬉しいぞ。

「助けてくれてありがとうございました」

「いやいや気にすることありません」

「そうなのですよ、困っている人を助けるのは当たり前のことですから」

「それでもやはり感謝はしておかないと
まじでヤバかったし

「ふむなかなか礼儀のある御仁ですな」

「どこがですか！？あんなところから話かけてる時点でおかしいですよ！？」

「すいません緊急事態だったもので……」

「しょうがないのですよ、稟ちゃん。人間避けられない時がありますから」

「ですよ。さすが程イク話が分かる。

「そういえばお名前をお聞きしていませんでしたな。私は性は趙、名は雲、字は子龍と申します」

「風は性は程、名はイク、字は仲徳というですよ……」

「寝るなっ！！……ゴホン私は戯志才と申します」

うわぁ普通に偽名だよこの娘

こつちとらこの世界の主な将の名前と顔を無理矢理知識として入れられたんだから偽名ぐらい分かるって……

にしても困ったなあ。このまま本名言ったら目立つだろうし……

……うん、困ったときの偽名だな。
「俺は性は空、名は海、字は戯児だ。空海と気安く呼んでくれ」気分は弘法大使だぜ

「では空海殿、貴方は何故あのようなところに？」

「旅をしてる途中相方と喧嘩して馬から落とされてしまっただけ。打ち所が悪く気を失っていたんだ。」

ふっ呼吸するように嘘をついたぜ

「そうですか？ 余程打ち所が悪かったみたいですね。一週間も寝ていましたし……」
「ぐう」「寝るなっ!!」

ミスメイクっ!! そんなに寝てたなんて

「おやどうかしましたか？」

「イエベツニ」

「そうですか、いやあ私たちは空から貴方が降ってきたと思っていましたね、勘違いみたいですね」

「Hahaha……そんなわけじゃないですわ。俺が空から降ってきたなんて」

やべえテンパってるよ僕

「ふむ、おかしいですね。流星を追いかけて墜ちた跡に貴方がいたのに」

絶対分かって聞いてるよ、この人ニヤニヤした顔が目には浮かぶよ
畜生

「アハハハハ」

とりあえず笑うことにした。なんか面倒なことになりそうだから笑うことにした。

「で僕がその流星だとしたらどうするつもりなのですか？ 趙雲殿」
下手にでてやらあ畜生

「なあに少し手合わせをお願いしたいだけです。貴方をここに運

んだときに身体に触ったのですが、なかなか鍛えられた身体、見事な武をお持ちのようだ。是非手合わせをお願いしたい」
嫌だよっ！！

「へえ星が言うなら貴方は強いみたいですね」
うるさいよギメガネ

「ふむ風も気になるところですね」
ああ唯一の理解者まで……だから金髪の少女はアテにならないんだ。

「いや俺にそんな武なんかありますから」

「貴方は嘘をつくときに主語が俺になっていることにお気づきかな？」

リアリー？

「Hahaha、ナニをイイマス、俺が嘘つくわけじゃないですよ。命の恩人に」

落ち着け僕、coolになるんだ関口雅人

「すごい嘘くさいですね」

「というか嘘ですね」

貴様らそんなに人を追い詰めて楽しいのかっ！？

こうなったら

「僕は誰かを守るためにしか武をふるいたくないんです。だから、腕試しに使うことは出来ません」

よし完璧だ。キタコレ

「ならば腕試しではなく、試合なら大丈夫ですね？」
へっ？

「互いに切磋琢磨していかなければ武は成り立ちませんからな」おい待てや青髪

「それになんか格好いいこと言ってみたみたいですが、そこから言われても」

「ですね」

はい、すいませんお腹痛くてすいませんさっきからトイレの中から

喋ってすいません

だってトイレが洋式でしかも個室だなんてこの時代にあってはならないはずなのにっ！！さすがにウォシュレットはないけど、洋式だけで満足ですハイ。

神様愛してる。

下痢とか腹痛がある時って和式とか辛いんだよ。洋式だからつい長引いてしまつて

それに久しぶりの便意だから辛くてしょうがない。30年近く時間が止まっている場所にいて身体は成長しないし食欲も性欲も睡眠欲もないし便意なんかあるわけねえッス

ある意味最高だった、ただ筋肉つかないのが辛かったなあ。だから今筋肉がついているのが不思議でしょうがない。30年分の筋肉が今ついたつてことか？

じゃあ今のは30年分の便意！？

ぐふっ死ねる。超痛い。

多分あの壁面駄神に口に擦込まれたもののせいだな
あれが原因で今に至るんだ、間違いない

何もかもあいつが悪いんだ。絶対に殴つてやる。ぐっすん

「では腹の調子がよくなつたら外に来てくだされ、お待ちしております
からな」

「貴方の着ていたものは机の上にあるので、確かめて下さい」

「風はお兄さんの活躍を楽しみにしていますよ〜・・・ぐう」寝るな
っ！！」「おっと、じゃあ外で待つてますね〜」

やべえ逃げ場がない。笑えない笑えないぞ。あんな三国志の英雄とバトルなんて死んだ妹も予想してないよ？
どうすればいい真美（妹の名前）？お兄ちゃんどうすればいいのかな？

あれなんか見えた
真美？真美なのか！？

「とりあえずイケ」
・・・・・・・・・・・・・・・・駄神だった。

《続く》

二話：真剣で私と・・・・・・・・（後書き）

次は趙雲さんとのバトオーです。バトオー

やっと雅人くんの強さが明らかにつ！？
燃え上がれ雅人くん

今回は短めでした。
すみません

三話・俺のコートはブラックホールだ(前書き)

バトルです。

戦闘描写がドヘタです。すいません

今回は微妙ですorz

駄文ですいません。

三話：俺のコートはブラックホールだ

どうも死亡フラグがぴーんとスカイタワー並に立ちかけている、いやむしる建築が終わった空海です。

駄神は言いたいこと言ったら帰りやがりました。

で、とりあえず下痢と腹痛から立ち直り部屋に戻ってマイコートを確かめました。一応このコートも神の宝の一つなんで下手な扱いはできません。通称>四次元コート<どつかの猫型ロボットが持っているポケットのコート版です。

神の家にいた時は車庫と繋がっていたんですが、今はちよいちよいパクってた神の宝しか入ってなかったorz

くそっあの壁面駄神め

まあ僕の武器は入ってたんで、よしとしましょう。それより気になるのが、この手足についてる枷なんですけど……取れません。

何をしても取れません。呪いですかね？

いやまあ鎖がついてるのは助かるけどね。僕の武器は鎖だし……
・ああそういうプレイのためじゃないよ？

ちゃんと使いこなしてるからね

はあ………現実逃避はやめます、やめればいいんでしよう。

「遅かったですな、空海殿。逃げたかと思いましたが」

ええ逃げようとなりましたよ？逃げようとしたら枷が急に引つ張られて、無理矢理外に………呪いだな。呪い

「ソナコトスルワケナイジャナイデスカ」

「口調がおかしいですね」

うるさい壁面駄神の仲間め

「では始めましょうか」

そういつて趙雲は僕の前に立ち槍を構えた。

ハイハイやればいいんでしょやれば

僕は四次元コートから二本の鎖を引きずりだし、左右の手に持った。

「おやそれが貴方の武器かな？」

「ええまあ」

「うむ、その枷は鎖を多く使うためにあるのですな」

こんななくても使えるけどね

「じゃあやりましょうか」

適当なところで負けよう。勝っちゃったら笑えないし

「ではいきますぞっ！！」

趙雲は槍を僕に向かってまっすぐに突き出してきた。僕は鎖を使ってそれを弾き、そのまま持っていたのとは別の枷についた鎖を振った。

「ぐっ……危ないですな。計4本の鎖を操るわけですか」

いやまあ本気でやれば何本でも操れるけどさ

「では速さをあげますぞ」

いやもう止めて

「はいはいはいっ！！」

連続で突いてくる突きを紙一重でかわしつづけた。

「やりますな。なら」

速さがさらに上がりました。しかもたまに左右に薙ぎが入ったりするし、めっちゃくちゃ危ない。

「ちよつやめて危ないっ!!」

「まだまだ余裕そうですねっ!!」

「全然っ!!」

畜生うざすぎるっ!!もう面倒くさいっ!!終わりにする。

僕は突いてきた趙雲の槍をかわしそこに自分の鎖を巻き付け、後ろに下がり距離をとった。

この鎖も神の宝だからね。その力をみせてやる。

現状はチエーンデスマツチみたいな感じである

「ふむ、私の武器に鎖をつけてなんのつもりですか？もしや引っ張って力比べでもする気ですか？」

「いやそんな手間のかかることはしないよ。ただ自分から離してもらうだけさ」

そう言っつて僕は鎖の力を発動させた。

「なっ重っ!?!」

その瞬間、趙雲は持っていた武器を手放した。

ガシャン

余りの重さに手放したようだが、武器が地面に落ちた音は、普通だった。

「私の負け………みたいですね」

あれ?なんか納得してなさげ?

「星ちゃんが負けるとは思っていなかったですぐう「寝るなっ!」

!」おおう、風としたことがあまりの驚きで寝てしまいました」

………アレ?勝っちゃった。勝っちゃいけなかったのにorz
またやっちゃった……orz

僕が落ち込んでいる間に、郭嘉は先程勝負の疑問点をあげていた。

「私も思っつていませんでしたが………最後のはなんで

すか？急に星が槍を手放したみたいですけど」
「ええ急に持てないぐらいに槍が重くなって……何をした
のですか？」

趙雲が疑惑の眼差しを向けてきた。

「Hahahaただ引つ張ったダケデスヨ」

普通に逃げ出した。

「そうですか……あんな強く引つ張るなんて、相当な怪
力をお持ちのようですね」

逃げ出せなかつたっ！！

やべえ話に変な方に……
こんな時は……

「趙雲殿、いいメンマがあるのですが……食べますか？」

「是非いただきますよう！！」

よしっ話逸らしたぜっ！！

「話変えましたね」 「程イク殿はおいしい飴があるのですが……
食べますか？」

「是非っ！！」

ふっ二人目だぜっ！！

もう一人は無理そうだけど……

「さあて助けてくれたお礼にお酒でもおごりますよ。とりあえず俺

の部屋にいきましょう」

四次元コートに神の室の一つぐ尽きることのない酒瓶があるし

「おおいいですなっ！！メンマを肴に酒を飲むのは楽しみです」

「いいですね〜では部屋に戻りましょうか」

「はあまったく二人とも・・・まあいいでしよう」

よし最後の一人も納得したみたいだ。やったぜっ！！

「ではいきましようさあいきましょう」

とりあえず面倒なことは過ぎ去った・・・あとは酒盛りのみ
っ！！

綺麗な女の子三人と飲むなんて楽しみだなあ〜

ところ変わって僕の部屋に

っつか口調安定しない僕

偽名も忘れそうになるし

「さあ空海殿メンマをさあメンマを早くっ！！」

うるせえよメンマ中毒

まあいいや

「はいお酒」

僕は四次元コートから尽きることのない酒瓶を出した。

「おっこれは？」

「僕の国のお酒だ」

日本酒最高っ！！

「おいしそうですね〜」

「おいしいよ程イク殿も飲むかい？」

「ええ飲みます〜」

僕は程イクの持っていた盃に酒をついだ。

「ありがとうございます〜では一口」

程イクは一気に盃を煽っていた。

「あつおいしいです」

「では私も」

趙雲にも注いであげると趙雲も一気に煽った。

「うむ、おいしいですね」

いや味わつて飲んでください。二人が飲んだのを見て安心したのか偽名女も飲みはじめた。

「おいしいでしょう？郭嘉殿」

「ええ美味しいですね……私名前言いましてっけ？
やっちまつたZE

「あるえ言つてませんでしたっけ？」

「言つてません偽名使つてましたし」

堂々といいやがったよコイツ

「ほら二人が言つてたのを聞いてたんですよ」

「いえ風は稟ちゃんの名前を言った記憶はありませんよ」

「おや空海殿暑いのですか？汗が滝のように流れていますか……
やべえやべえよこれ笑えない笑えないよ

「Hahaha」

笑つてごまかすのが、日本人の悪いとこだね。曖昧なものを曖昧で終わらせるのは大事だと僕は思うんだ。

「でどうしてお兄さんは稟ちゃんの名前を知っていたのですか？」

「どうしよう正直に言つたら絶対に病院につれていかれる……」

……

「それはデスネ……噂ですよ。噂、あなたたちが流れてたんですよ」

「ほお、我々も有名になったものだな」

「めっちゃくちゃ怪しいですけどね」

うるさいよ偽名使つてたくせに

「まあ今回はお酒の変わりに見逃してあげましょう」

上から目線が駄神に似てる。やはり親戚じゃないのか？

「なにか失礼なこと考えてませんでしたか？」

地の文読むあたりがさらに似てるなっ！！

「イエベツ二」

目を逸らして言います。小心者なので

「にしてもなかなか空になりませんなこの酒瓶」

「あつそれは空にならないよ」

「どういうことですか？」

「それは>尽きることはない酒瓶くって言って絶対に尽きることはないんだ」

「ほうそれは面妖な」

あるえ〜？またやっちゃったZE

「いやまあとにかく飲みましょう（滝汗）」

「そうですね」

ふうごまかせたかな？

「にしてもお兄さんは不思議な存在ですね〜」

まあこの世界の人間じゃないし一回死んでるし

「まあいいではないか……で空海殿？」

「なんですか？」

怖いよ。この人怖いよ

「メンマは？」

「はぁ……ではこちらを」

僕は四次元コートからメンマを取り出した。

「おお美味しそうなメンマですな。では失礼して」

趙雲はそういうとメンマを一口食べた。

「……」

あれなんか震えてる。

「お気に召しませんでしたか？」

あれまじかったのか？

「空海殿っ！！」

「ひっ」

両肩をがっしりと捕まれた。逃げられない。

「どうやってこのメンマを作ったのですか!？」

いやただ神のガラクタから拾っただけだし

「こんな美味しいメンマは初めて食べた。これも尽きることはないのですか!？」

「いえそれは違います」

> 尽きることはないメンマ壺とかないだろ!？」

「はぁ………そうですか。残念です」

こうしてお酒の入ったどんちゃん騒ぎは次の日の朝まで続き

次の朝三人とは別れることとなった。再びお礼を言って、何故か真名を交換することになった。もちろん郭嘉は渋々だったが………
まぁいいや
さぁてどこに行こうかな？

《続く》

三話：俺のコートはブラックホールだ（後書き）

稟ちゃんの鼻血シーンをかけなかったのが心残りです。

っていか前話読んで気づいたんですが………姓っていう字の

変換間違えてる

性って打ってる

馬鹿だ俺馬鹿すぎる

誤字修正は暇になったら頑張ります。

誤字脱字は報告お願いします

四話・正直黒いノートの中身がすごい(前書き)

第4話ですたい

あの方たちと出会います。なんか恋姫のキャラとの絡みが難しいです。

でも頑張ったよ俺
頑張ったよ俺

お楽しみください

誤字脱字の方向お願いします

四話・正直黒いコートの中身がすごい

どうもこんばんみつ！！みんなのアイドル空海さんです。仲良し三人組（笑）と別れて一週間が経ちました。……………絶賛迷子中ですorz

陳留に行って曹操さんでも見に行こうとしたらこれですよ？

ヤレヤレ（、ー、）

いや確かにこの世界の地図は頭に入ってるよ？でもね、忘れてたんだ……………僕が方向音痴だったってことを

しょうがないだろっ！！ずっと30年近く引きこもりのニートみたいな生活して外出なんかしてないんだぞっ！！家から出てもするとしたら勝負とか鍛練だし

出ても外は真っ白な空間だったし、何をしろと！？

それにこの一週間の間飯が全部うま棒です。歯茎が痛いです。栄養が足りません……………ビタミンが足りません。

何故か四次元コートの中に食料と言えるものがメンマとうい棒しかなくて……………殺意が湧きました。あの壁面馱神に対して今うい棒コンポタージユ味8本目です
計めんたい味13本、タコ焼き味16本、テリヤキバーガー味15本、チーズ味12本、サラミ味33本です。

まじでぶち殺したい。

んで今ようやく荒野を抜けて森の中に突入しました。今日は絶対果物に肉を食べる。何があっても食べる・・・ジャマシタラコロス。

おっと野生に帰りかけたぜ

水も飲みたいし・・・アルコールはきつかったZE

あれは水分として摂取していい量じゃなかった。

にしても

この森広っ！！

これなら湖とか川とか水源があるはず

とまあうろつろつすること一時間・・・ようやく見つけましたよ湖さん。
ん。

愛してる湖さん愛してます。

湖への愛を唄いつつ湖に頭から突っ込み水を飲みつづけた。現代っ子な僕だけど生水とか気にしないぜっ！！

お腹壊しそうだけど気にしないぜっ！！

ガツキーン

がぶ飲みし続けているとどこからか金属と金属のぶつかるような音

が聞こえた。
割と近いみたいだな。

僕は気になったので辺りを見回し三人の女の子が賊っぽい人達と交戦中なのを発見した。

黒髪のサイドポニーテールの少女が一人で頑張っていたようだがさすがに守りながら戦うには人数が多いのか怪我をしているのか無理そうだった。

桃色の髪をした女の子は赤い髪をした少女を背負っていて戦力外だし

どうしよう面倒だなあ………ってあれ枷が!? 枷が勝手に!?

ぎゃあー無理無理まだあんなに……30人ぐらいいるじゃん!! いやだあーしかも女の子たちよくみたら劉備たちだし!!

大丈夫主人公みたいな人たちは死なないからっ!! 僕が助けるまでもなく死なないからっ!!

いやあー僕は交戦中の場所に引きずりだされた。

僕は到着と同時に

何故か賊が振るってきた剣を弾き飛ばしていた。枷めっ!!

さすがに賊さんたちも僕に気づいたららしく

「誰だてめえ!?!」

僕にも敵意を向けてきた。

「いや成り行きといつかなんとというかで登場の空海さんです。はい?」

割と疑問形だった。

「てめえ邪魔すんのか!？」

うわぁ怒らせちゃった？

「いやなんか大きな男たちが大勢でどうして可愛い女の子に襲いかかっているのかなぁ〜?と思ひまして」

下手に出て聞いてみた。

「俺達はそいつらに家族を殺されたからその仇をつつてただけだっ

!!」

「何をいう賊の分際でっ!!我々は世にあだをなす賊を成敗しただけだっ!!」

黒髪の女の子も鼻白んで反論する。やめて巻き込まないで〜

「関係ねえっ!!お前らが俺達の仲間と家族を殺したことにはちげえねえんだからっ!!」

「黙れっ!!人を殺して身ぐるみをはぎそうやって生きている貴様たちなど獣と変わらないっ!!それを殺して何が悪いのだっ!!」
「いやそういうことじゃねえと思うんだけどね?それにこの場においてそんなことを言うとなね・・・」

「なんだとてめえっ!?!ふざけんなっ!!」

ほら逆効果なのですよ。まあ元々仲直りなんざする気がなかったみたいだしぶっっちゃけ関係ないかな。

「どかねえならてめえも殺すぞっ!!」いやどきたいのはやまやまなんだけどね?枷が・・・枷が勝手に

「うう鈴々ちゃんが具合悪くなければ・・・」

なんか桃色頭の女の子まあ劉備だけが泣き言言ってるけど無視した。

これは僕が助けなければいけないフラグなのだろうか？

「誰かは知りませんがお逃げください。我々の事に巻き込ませるわけにはいかない」

なんていい人なんだろうっ！！さすが関羽っ！！

「死ねえっ！！」

でももう遅いです。

賊は僕ごと劉備たちを殺すことに決めたらしく、僕にも切り掛かってきた。僕はそれをかわして切り掛かってきた賊の顔を殴り吹っ飛ばした。

「なっ！？」

賊さんたちは乱入してきた僕がわりと強いので驚いていたようだ。劉備たちも微妙に驚いていた……僕そんなに弱そうに見えるのかな？

……男の子としてわりとシヨツクなんです。

まあ24歳で男の子っていうのもちゃんちゃらおかしいんだけどね。まあ精神年齢は50歳越えてるけど……

「たかが一人増えただけだ！！気にすることはねえ、やっちなえっ！！」

いや気にしてください。むしろお引き取りを

「すみません、巻き込んでしまつて・・・」
「まあ気にしないでください」

やっぱり関羽ちゃんいい娘っ!!こんないい女の子はこの世界で初めてです。あれなんか涙が・・・

あの青髪さんは性格歪んでたし、茶髪眼鏡はチクチクといじめてきたし、金髪幼女は仲間かと思つたら駄神の親類だったし・・・

「うう・・・」

「えっ?ちよつなんで泣いてるんですか!？」

「君の優しさが心に染みて・・・ぐすっ」

なんかみんな引いてた・・・賊さんたちすら引いてた。

気にしない・・・気にしたら負け。気にしたら負け。

「よしっ!かかつてこいやっ!!」

とりあえず関羽の優しさで頑張ることにした。

「やれつやつちまえっ!」

「おいおい、それはヤラレ役の台詞だつて」

「うるせえっ!」

僕は、四次元コートから鎖を引っ張りだし、それを振るつて襲いかかつてきた賊さんたちの先頭にいた賊Aの意識を奪った。

「はい、次行つてみよう。アルファベットじゃ足りないから戦闘シーン省略しない?」

「何意味の分からないこと言つてやがるっ!くたばれっ!!」

だいぶ面倒になってきたので、地面に鎖を這わせて、賊BからPまでの足に絡ませて、引っ張り転倒させ、そのまま木に吊した。

「~~~~ギヤア~~~~っ」「」「」「」

「さすがに重いな。木が可哀相だ」

「ひっ化け物だ」

失礼なっ！！一度死んだぐらいで化け物なんて世の中には12回死ねるやつとか10分間に15回死ねるやつとかいるのに、ひどいっ！！

なんとなくムカついたので残った賊さんたちは鎖でグルグル巻きにして行動の自由を奪った。

「いやぁ面倒くさかった」

「~~~~~~~~」

関羽と劉備は絶句しているみたいだった。そんなに僕小物臭したかな？

わりと心外なのだけれども~~~~

うるさいのは嫌いなので賊さんたち全員に鎖で猿轡わをした後、劉備たちと向き合った。

「たっ助けていただき、真に感謝します」

うん関羽可愛い

「いや気にしなくていいよ」

「私は姓は関、名は羽、字は雲長と申します」

礼儀正しい、プラス10ポイント。100ポイント貯まったらお持ち帰りします。四次元コートに

遅れて劉備も

「わつ私は姓は劉、名は備、字は玄德です。後ろにいるのは、鈴・・
・じゃなくて張飛ちゃんです」

うん、こつちも可愛い。プラス10ポイント。100ポイント貯まったら（以下略）

「私たちは、世直しをするための旅をしまして、その途中張飛が体調を崩し、街に向かっていているときに賊に襲われてしまったんです」

張飛が体調をね

「ちよつと見せてもらっていいかな？」

僕は少し気になったので、張飛の具合を見せてもらうことにした。体温を触って確かめるとかなり高く、呼吸も荒い。

「少し寝かせてあげよう」

「あっはい」

劉備は張飛を下ろして湖の近くまで行き、張飛を木の下に寝かせてあげた。

その間に僕は四次元コートから手ぬぐいをだして、湖で濡らし張飛の額に置いた。

「度々すいません。助けていただいたばかりか、妹の様子まで見ていただき」

「いや、気にすることはないよ。僕が好きでやってるんだから」さらに10ポイント。100ポイント貯まったら（以下略）

少し張飛が心配になったので薬を与えることにした。四次元コートから薬を取り出し、湖から水を汲み張飛に飲ませようとした。持ってよかったエス ックイブ

「それは？」

関羽がガン見してた

「薬だよ。熱を下げる薬と体の免疫力をあげる薬」

「めんえきりよく？」

「ああと、要は風邪が治る薬。不安なら先に僕が飲んでみせようか？」

まあ名前も知らない他人からもらったものなんて信用できないよね

「いえ、失礼しました。貴方は私たちの命の恩人とも言える人です。疑うなんて失礼なことでした。お任せします」

いやまあ普通だと思うけど・・・

「それで鈴々ちゃんが助かるんですかっ!?!」

「うん、少し安静にしてればバツチリ・・・ああ完璧に治るよ」

「よかつた」

そう言つて劉備は笑顔を浮かべていた。甘ちゃんだなあ、他人をすぐ信用するなんて周りの人が全員優しいとは限らないのに・・・
・プラス10ポイント。可愛いから許すっ!!100ポイント貯ま
(以下略)

僕は張飛に薬を飲ませて、四次元コートから毛布をだし上にかけてあげた。

可愛い女の子に優しいのは僕のデフォですから!!

「何から何までですいません」

「ありがとうございますっ!!」

やっぱり二人共可愛いな。さらにプラス10ポイント。100ポイント
(以下略)

「いいよいよ気にしないで、可愛い女の子を助けられて役得だからな」

「いっいえそんなつかっ可愛いだなんて」

おお関羽可愛い。もうお持ち帰りしてもよくな?

「貴方の名前を聞いてもいいですか？」

あつ名乗り忘れてた。

「失礼。僕は姓は空、名は海、字は戯児。気安く空海とでも呼んでくれっ!!」

ぐつと親指を突き立てながら自己紹介を試してみた。

「空海殿はどうしてこのような場所に？」

・・・リアクションがなかったorz

「いやぁ迷子になっちゃってたまたま着いたんだよ」

「そうなんですか？空海さんはどこにいくつもりだったんですか？」

「陳留の方に行こうとしてたんだ」

「どうしてですか？」

劉備は身を乗り出して質問してきた。なんかぐいぐい来るなこの娘

「曹操殿を一目見たくてね」

「曹操殿の下で働くためにですか？」

うおっ関羽も!?

「いやー目見るだけだよ」

まあ実際は気分だけど

「愛紗ちゃんっ!!」

「ええ空海殿ならっ!!」

二人は身を寄せ合って何か話し合っていた。なんかのけ者にされるぜ………のの字でも書いていよう。

のの字を書いていると不意に劉備が僕の両肩を掴んでいった。

「私たちの仲間になってくださいっ!!」

「だが断るっ!!」

あるえ?なんか即決しちゃった。

> 続く <

四話・正直黒いコートの中身がござい（後書き）

ちなみに作者は関羽が大好きです。

だから一刀くんが嫌いですwww

お楽しみ頂けたら幸いです。

次でようやく鎖の力がどういうものか明らかになります。次の話も楽しんでくださいね

ジャンケンポンっ！！

うふふ・・・

調子に乗りました。

五話：鎖は何よりも呪われていて（前書き）

5話です

鎖の力が明らかになります

まあ駄文長文ですいません

誤字脱字は報告をお願いします

五話・鎖は何よりも呪われていて

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………どうしてついてくるんデスカ？」

「いえなんか嫌な予感がしたもので」

ちっ

どうも空海さんです

現在勧誘を受け速攻でお断りしたら、理由を上目遣いで聞かれ、グダグダと言いつつ話を聞いたら、何故か張飛の具合がよくなるまで一緒にいることに…………

いやまあ確かに言い方が悪かったよ。つい劉備の可愛さに負けて、つい「ほら、出会ったばっかであんまり君達のこと知らないからさ」

って言ったら「なら、知り合うために一緒に旅をしましょう」と言われ

つい「なら張飛殿の具合がよくなるまで一緒にいます」って言って

しまいましたorz

だってあんな目で見られたら……ねえ？無理だよね？

まあそれで一応は納得したらしく、あちらは僕をどうやって仲間にするか、相談してました。

でその隙について、食べ物を探して来ますって言って、逃げようとしたら……with関羽なわけですよ。

「……そうデスカ。なら関羽殿はあちらを探してください。二手に別れた方が効率がいいでしょう？」

「いえ、初めてきた場所で、二手に別れては、はぐれる可能性もあります。一緒に探しましょう」

はぐれてえんだよっ！！

あああの目は逃がす気ないよ。完全に捕まっちゃったよ僕

こうしてウダウダしながらも食料を集め、湖の畔にいる劉備のもとに戻った。

もちろん四次元コートに食料をいれることは、忘れなかった。

自然破壊？ナニソレ？おいしいの？ってぐらい森の恵みを蹂躪した。関羽のジト目が忘れられません。

「あつおかえりなさい空海さん」
「ええただいま戻りました」

僕はそう言いながらも横目で張飛の様子を盗み見をした。ふむ、呼吸も安定してきたし、熱も下がったみたいだな、明日の朝には治るだろう。

そう思い視線を劉備に戻すと劉備がこちらをガン見していた。

「ナニカ？」

「いえ空海さん優しいなあと思って」

当たり前ですっ！！僕はフェミニストですからっ！！

「ははっそんなことないですよ」

「ふふ」

なんか笑われたよ。

「そんな空海さんだからこそ仲間になって欲しいんですっ！！」

直球だな。直球すぎるだろ……ラミレスとかだったら余裕でホームランコースですよ。はい

「だからそれは張飛殿が起きるまで少し考えさせてください」
「うう………わかりました」

そう言うと劉備は渋々ながら引き下がってくれた。あつそんな上目遣いで見ないで、死んじゃうから……死因萌死にかになるから

細部を忘れたせいで思い出せないのだが、劉備の思いつてなんだった？

「なんでそんなに、僕に仲間になって欲しいの？」

劉備と関羽は顔を見合わせ、そしてポツポツと語り始めた。

「……今の大陸はとても荒れています。」

「官職の人間が好き勝手をやり民たちに暴政を強いて、民たちを苦しめ、それに耐えられずに賊に身を落とし、さらに自分達より弱い人達を苦しめています」

「三人で色んな邑を回って苦しんでいる人たちを助けているけど、その間に別の邑の人が苦しんでいます」

「もう……三人だけじゃ何もできないのです。三人じゃみんなを笑顔に出来ないんです」

「だから僕に助けて欲しいと？」

「はい！お願いします」

僕は頭をがしがし掻きながら、どうしようか考えていた。すると劉備は、僕を説得をするためにさらに勢いづけて、自分の理想を言った。

「私はみんなを笑顔にしたいんですっ！！」

「みんなってというのは君の仲間とか、大切な人かい？」

「いえ、この大陸の全ての人を笑顔にして、そしてその笑顔を守りたいんですっ!!」

……あっ?

ああ

「それは素敵な幻想だね」

僕は笑顔を浮かべながら言った。

「それはどういう意味ですか?」

関羽は僕が込めた悪意に気づいたらしく、すこし眉を潜めて苛立ちを込めた声で聞いてきた。

「そのまんまの意味だけど?」

僕は小首を傾げて、笑いながら聞いた。

それに関羽はさらに苛立ちを露にしつつ言った。

「それは桃香様の理想が叶わない夢や幻想だと言う意味ですか?」

「まあそう……」

「貴様は桃香様の理想を馬鹿にするのかっ!!」

うんキレられた

……ちよいづざいかな

「キサ……」「黙っている関雲長」なっ……」

僕は少しだけ威圧するように言い、関羽を黙らせた。

「僕は、どんな理想であれ、夢であれ、それがどんなに届かないものでも、どんなに下卑たものでも、どんなに愚かなものでも決して馬鹿にしたりはしない」

「ならっ……僕は今劉玄德と話をしている。黙って聞いている」……くっ」

関羽は僕をめちやくちや睨んでいたが、とりあえず劉備と話していると云ったのを理解したらしくおとなしく引き下がった。ああ少しだけ猪な部分があるなあ……はあ

「で劉玄德。君に質問だ」

「はい」

劉備は真剣な目で、僕を見つめてきた。……はあ

「君は君が殺してきた人たち殺していく人たちを背負う気はあるのかい？」

「えっ?どづいづことですか?」

劉備は理解出来ないと言わんばかりに、首を傾げていた。……はあ、憂鬱だ。

というかもうこの前思いついたこの世界を平和にする方法をやってしまおうかななどと考えていると……

「桃香様は、戦場に出ることはない。だから人を殺めていくなんてことはないっ!!人を……いや賊などを殺めていくのは武人である私と鈴々だっ!その質問は私たちにすべきだ!!」

関羽がでしゃばってきた。ああめんどくさい……帰りた

というかこの娘も理解してないのか……それに賊などって……はあ嫌だなあゝ

「では聞くよ劉玄德、君は今までに人を殺したことはない?」

「はい……私は強くないからいつも二人に守られて……何も出来なくて」

劉備はなんか落ち込んでいた

「そんなことはありませんっ!!桃香様が義勇軍を後ろから指示して賊を追い払ったこともあったじゃないですか!何も出来ないなんてことはありませんっ!!」

「……愛紗ちゃん」

……なんか置いていかれ気味だったorz

「よしじゃあ劉玄德、勝負をしよう」

「「はっ？」」

何故か呆気に取られる二人

「君が一本でも僕から取れたら勝ち、なんでもいうことを聞こう。ただし、君の武器には僕の鎖を巻いて刃が切れないようにするからね」

「なっそんなの……!？」

関羽がなんか言ってるが無視

「ただし僕は、武器は使わないし、一步も動かない。君は、その武器でしか攻撃してはならない。いいね？」

関羽と劉備は顔を見合わせていたが、その条件なら楽勝だと思っただのか、その勝負をのんだ……僕が勝てない戦いをするとも？

僕は劉備から劉備の武器である剣を受け取り、その刃の部分にくるぐると四次元コートから出したいつもの鎖を巻いた。

「はい」

「あっありがとうございます」

お礼を言われる意味が分からんただ武器を返したただけなのに……

「重いかい？」

「いえ大丈夫ですっ!!」

あっそ

「始める前に行っておくけど……関羽殿が手を出したらその場で負けだからね？」

「わかりました」

なにその不満そうな顔

「じゃっやるうか？」

「はいっ!!行きますっ!!」

そう言っつて劉備は刃を鎖でグルグル巻きにされた剣を構えた。

そしてその瞬間僕は鎖の力を発動させた。

「あっ……!？」

劉備は不意に剣を落として、不思議そうな顔をした。

「どうしたの？」

「いえ……ちょっと……」

そう言っつて劉備は、地面に落ちた剣を拾おうとしたが、持ち上げる
ことすら出来なかった。

「その剣でしか、攻撃しちやダメだからね？」

僕はわざとらしく笑いながら言った。関羽は劉備の不可解な様子に
気づいたらしく劉備に何があつたか尋ねていた。

「どうしたんですか!？桃香様っ!！」

「ぶっ……武器が重くて持ち上がらないのっ!！」

「なっ!？先程まで普通にお持ちになつていたではないですかっ!
?」

「分かんない、急に持ち上げられないくらい重くなって……」

関羽は僕が何かをしたと感じたらしく、僕を睨み付けながら聞いて

きた。

「貴様っ！何をしたんだ!？」

僕はニコニコしながら答えた。

「その鎖は君達の言うところの神の宝、神宝、宝具の一つ」

「なっ!？」

高らかに詠うように言う

「その名を>殺された者の怨鎖<その力は結びつけられたものが殺してきた人たちの重さを与えるという力だよ」

「なっ桃香様は人を殺してなどいなっ……………直接的にはな……………それは、どういう意味だっ!！」

「確かにその剣で人を殺したことはないだろうね……………だけど劉備…君は義勇軍を指揮して賊たちを殺した」

「それは……………」

「人を殺したことにわりはないよ……………さあてで、それは何人分の重さかな?一人?二人?違うよね?何百人分もの重さがあるはずだよ」

劉備は黙って僕の話聞いていた……………関羽は何か言いたけだっただけど……………目が怖いよ

「で君は自分が人を殺したことを理解したかい？」
「……はい」

劉備は唇を噛みしめながらも、僕の問いかけを肯定した。

「なら今日の勝負は引き分けだ」

「はっ？」

「僕は君に死者の重みを理解して欲しかったんだ」

劉備と関羽はうつむいて、静かに僕の話聞いていたが……もう飽きたからやめよう

「それだけさ。じゃあ続きは明日ね」

そう言っ僕は再び森の中に入っていった。

ほら僕エアリーディング1級だからあそこにいちゃいけない気がして

とりあえず明日は、二度と僕を仲間にしたとは思わせないように
しないと……はぁ可愛い女の子に嫌われるのは辛いなぁ

《 続 》

五話：鎖は何よりも呪われていて（後書き）

鎖の力が明らかになりましたね

> 巻き付いたものが殺した人たちの重さを与えるく

ちなみに「もの」は物でなく者です

物に巻き付いた場合保持者に効果が発揮されます

巻き付かなきゃ力が発動しません

趙雲さんはこれでやられたみたいですね

あああと伸び縮み自由は基本的な設定です。一応は鎖の力ですが…
…明記はしませんでした。

ちなみに副作用というか対価があります。それは後々書いていきますので少々お待ちください。

次回をお楽しみに

・・・楽しみにしてる人いんのかな？
まあ頑張ります

六話・泳げない？なら手取り足取り……ごめんなさい(前書き)

やっと蜀の三姉妹編が終わります

誤字脱字の報告お願いします

感想ありがとうございます(T-T)

六話・泳げない？なら手取り足取り……ごめんなさい

コキツゴキツ

ああ首が痛い

どうも劉備たちにテントと寝袋を貸して、自分は鎖で作ったハンモックで寝た空海さんです

あまり寝心地がよくありませんでした……当たり前か

「うーん」

ガサツ

伸びをしていると、テントから誰か来たみたいです。

振り向くと……

ドンッ

「ぐふおっ」

突撃された、ロケット頭突きを想像してくれ……腹部は辛いよ

「お兄ちゃんが鈴々を助けてくれたのか？」

張飛ちゃんでした。張飛ちゃんも可愛いよね……初絡みでロケット

頭突きは痛いけど

「いや張飛殿を助けたのは僕じゃないよ」

「でもお姉ちゃんたちがお薬と寝床をくれたのはお兄ちゃんだって言ってたのだ」

「僕は薬をあげただけだよ。君の面倒を見ていたのはお姉ちゃんたちだから、お姉ちゃんにお礼を言うといい」

「それでも鈴々はお兄ちゃんのお礼を言うのだ。助けてくれて、ありがとうなのだ」

「どういたしまして張飛殿」

そう言つて僕は張飛の頭を撫でた。柔い柔いよゝずっと撫でたくなる柔らかさ……今なら四次元コートに入れてもバレないかな？

「鈴々でいいのだ」

「んっ？それは真名だろ？ダメだよ僕みたいな不審者に預けちゃ」

「命の恩人に真名を預けるのは、当然なのだ。だから受け取って欲しいのだ」

僕は多少困つたが、こんな可愛い娘に真名を預けられるのだから、断れるわけもなかった。

「分かったよ。喜んで預かるよ。僕の真名は雅人だ。よろしくね鈴々殿」

「鈴々なのだ。殿とかいらないのだ」

なんか呼び捨てにするのも……

「ああなら鈴々ちゃんはどうだい？」

「まあそれで許すのだ」

「ありがとう」

でまた撫でた。やっぱりお持ち帰りしたい……よしっしょう

僕は、鈴々ちゃんの両脇に手を入れて、高い高いポジションをとった。

「高いのだっ！！……なんか子供扱いされてる気がするのだ」

鈴々ちゃん何か言ってる気がするが聞こえない

さあて……僕はそのまま四次元コートに入れようとすると……

「空海殿」

「ちっ」

関羽が起きてきた……邪魔をするなっ！！

こんな可愛い生き物をお持ち帰りなんかなかなかできないんだぞっ
！！

「どうかなされましたか？」

関羽は舌打ちした僕に疑惑の目を向けてきた。

「イエベツ二」

「そうですか」

「でお兄ちゃんいつまでこのままなのだ？」

「ああごめんね鈴々ちゃん」

「いいのだ。高くて楽しかったのだ」

そう言つて鈴々ちゃんは僕に笑顔を向けてきた。やめてそんな眩しい笑顔向けないでーやましい僕にそんな笑顔を……

「鈴々」

「なんなのだ愛紗？」

「空海殿に真名をお預けしたのか？」

「そうなのだ。お兄ちゃんの真名も預かったのだ。」

関羽は微妙な表情でこちらを見ていた。

「何か？」

「いえ……命の恩人に真名をお預けしないなど失礼だったと思ひまして」

ああそんなことが

「別に気にしなくていいよ。怪しい人に真名を預けないのは、当然のことだからさ」

「いえ……愛紗とお呼びください」

「いやそんな……」
「呼んでください」

なんか威圧が……

「分かったよ愛紗ちゃん」

「ちゃっちゃん!？」

「あっ嫌だったかな？」

おおすごい取り乱しよう……可愛いぞコノヤロウ

「いえ…その驚いただけで…別にその……」

関羽は顔を赤くしてうつ向いていた……男慣れしてないんだろうな
……もう持ち帰ろう

姉妹二人持ち帰ろう

「あっ何やってるんですか？」

劉備がこの騒ぎで、目を覚ましたらしい

「ああ二人と真名を交換したんだよ」

「あっなら私も桃香って呼んでください」

私もって……二人が預けたらいいのかよ

はあ……どうせ何を言っても無駄なんだろうなあ」と微妙にがっかりしつつ言った。

「分かったよ、よろしく桃香ちゃん。僕の真名は雅人。よろしくね」

「はい雅人さんっ!!」

人好きそうな笑顔を向けてきた……可愛い……三姉妹全員お持ち帰りだな

さて四次元コートにいれるか……と下らないことを考えていると

「では鈴々も起きてきたことですし、雅人殿。答えをお聞かせください」

ちっ忘れてなかったか……このまま別れられたらベストだったのに……そんなことを思いつつ、貸し与えたものを四次元コートにしまいながら言った。

「その前に……少し聞きたいことやりたいことがあるんだけどいいかい？」

「別に構いませんが……何を？」

というかキミたちはどこからテントとか出したかを聞かないんだね

？……僕のことを珍妙な生き物とでも思っているのだろうか
……はあ

「ああと三人共泳げるかい？」

「「「はっ？」「」」

「だから泳げるかい？泳げなかったら……手取り足……」ごほん

……なんか殺気が

「泳げるのだ」

「……」

「泳げますが……それがどうかしたんですか？」

一人答えてないけど……

「愛紗ちゃんは？」

「………ません」

「えっ？」

「泳げませんっ！……」

愛紗は顔を真っ赤にして大きな声で答えた……可愛い……泳げない

のか……なら僕が手取（以下略）

「そう……分かったよ。で桃香ちゃん」

「はい？なんですか雅人さん」

「昨日君は死者の重みを知ったね？」

まあ無理矢理理解させたんだけど……

「……はい」

桃香と愛紗はうつむきながら答えた……鈴々は何か分かってないけど

「じゃあ聞くよ？君は誰かの笑顔を守りたい？」

「はいっ！！」

即答か……

「それは君が殺してきた人たちのことを考えての返事かな？」

「はい……確かに私は人を殺しました……けど……だからこそ、私はみんなを笑顔にしたい」

……そっか

そして桃香に続き、愛紗も言った。

「それに私たちが殺してきたのは、世にあだなす賊たち……決して民を殺してはいません」

その言葉に、桃香は首をふり肯定した。そして鈴々ちゃんも、会話の流れで理解したのか首を縦にふっていた。

ああ……ダメだよ。分かってない……ダメだ、君達と僕は相入れない存在だ。

絶対に君達はみんなを笑顔にすることなんか出来やしない……まあ言ってはあげないけど

……だから

……だから

徹底的に嫌われてあげよう

「うん分かったよ」

僕が笑顔を浮かべながら話しかけると三人共顔を見合わせ笑顔を浮かべた。

「お兄ちゃんは鈴々たちの仲間になるのか？」

ああ鈴々ちゃんも僕を仲間にする話聞いてたんだ

僕は是でもなく否でもなく……………言う。

「最後の勝負だ」

愛紗と桃香は顔を見合わせ頷いた。きつと昨日と同じだとも思っているんだろうなあ……………甘えんなよ

「じゃあ最後の勝負の内容の前に質問です」

「えっ？あっはいどうぞ」

桃香はやる気を削がれたような顔をしたが無視

「今君は川の上で、小さな二人乗りの船に乗っています」

「えっ？」

何の話みたいな顔してないで黙って聞いてなさい

「すると前方から愛紗ちゃんと鈴々ちゃんが流れてきました……………川の流れは早く愛紗ちゃんはもちろん鈴々ちゃんは泳げずに溺れています……………さあ君はどっちを助けますか？ああちなみに船は二人以上乗ったら沈みます」

「えっ……そんな……」

桃香は何か考えているがきつと……

「そんなの選べませんっ！！二人とも大事な私の家族ですっ！！二人とも助けます！」

「どうやって？」

「それは……」

桃香が悩んでいる間、愛紗が人を殺せそうな視線を向けてきたが相手にしない。ちなみに鈴々ちゃんは分かってない。

「頑張ってみんなで……」

「はい時間切れ、君が迷っている間に二人とも死んでしまいました」

僕は桃香に笑顔を向けて言った。

「なっ雅人さん……そんな……」

桃香は困惑した表情を向けてきたが……もちろん無視

「桃香ちゃん……人生は選択肢の連続なんだ。君はいつか王になら

なければいけない……なら選べ、どちらかを選べ」

僕の言葉に桃香は困惑しながらも返してきた……まあ今から王とか言われても分かんないだろうね。

「嫌ですっ!!誰かを捨てなきゃ救えないなんて嫌ですっ!!」
はあ……まあ言うと思ってたよ……だから

「なら君に選択肢を与えよう」

僕は、そう言って四次元コートから鎖を出して、愛紗を縛った。

「なっ!?!」

愛紗は僕の突然の行動に驚き、桃香は状況の変化を察して僕を強い視線で見つめてきた。

「何をするつもりですか？」

「だから選択肢をあげるよ」

僕はさらに愛紗を引き寄せ、鎖を四次元コートから出し続けた。

「神秘伝……縛鎖球」

「何をつ！？」

「……………」

「はぁ！？」

僕は大量に出した鎖で球を作りその中に愛紗を閉じ込めた。愛紗は阿呆みたいな声をあげていたが……

まあ僕が小さな声で言った言葉に対してだろうけど

「僕の鎖は空気すらも捕まえる」

うん決め台詞も言ったし

「何をするんですかつ！！」

桃香が僕を怒鳴りつけてきたが、僕はそれに対して鎖で出来た球を叩きながら答えた。

「この球は中からは開けることはできません。ちなみに呼吸は出来ますよ……隙間多いから……水とかも入ります」

鈴々ちゃんも、さすがに事態の変化に気づき、僕を睨んでくる。

「愛紗に何をする気なのだ？」

僕は笑みを浮かべながら言う。

「今から僕は逃げます……捕まえられたら君達の仲間になるっ」

「本当ですか!？」

喜ぶにはまだ早い

「ただし……」

そう言っ僕は球i n愛紗を湖に蹴りおとした。

「「なっ!？」」

うん二人ともびっくりしてる。僕は球と繋がっている鎖を地面に置きながら話しかける。

「愛紗ちゃん!」

桃香は悲鳴のような声をあげていた。

「速く引き上げないと死んじゃうよ? ああちなみに二人で引き上げ

ないと上がらない重さだから」

そう言ってから僕は、コートを翻しその場から去ろうとする。

「待つのだっ！」

鈴々ちゃんが飛びかかってきた……ああ分かってない

「速く引き上げないとお姉ちゃん死んじゃうよ？」

桃香はすでに鎖を引っ張り始めている。

「どうしてこんなことをするのだっ!？」

鈴々ちゃんは苛立ちの中に少しの悲しみを籠めた口調で聞いてきた。

はっ甘いな

「どうしてだろっね？張飛殿」

僕は狂ったような笑顔を浮かべて言う。

「くっ」

鈴々ちゃんは、僕を無視して桃香のもとへと走っていった。

さあて捕まったら殺されそうだし……逃げようか

僕はそう言いながらもゆったりとした歩調で、歩いていた

テキストに

side三姉妹

「早く引き上げなきゃ愛紗ちゃんがつ!!」

「分かっているのだつ!!」

そう言っつて二人は球に繋がっている鎖を引っ張り続けた。そしてようやく球は湖から引き上げられた。

「愛紗ちゃん!!」

二人は鎖を急いで解いていく……そして……

「桃香様っ!!」

中から出てきたのは水滴一つついていない愛紗だった

「「えっ?」「」

桃香と鈴々は理解出来ないという顔をして愛紗に尋ねた。

「愛紗水が入ってこなかったのだ? 濡れなかったのだ?」

「いや全く入ってこなかった……むしろ何が起きたか理解出来なかった」

愛紗自身も意味が分からないという表情をしていた。

「愛紗ちゃんは湖に落とされちゃって、それで早く引き上げないと愛紗ちゃんが死んじゃうって……雅人さんが」

桃香は困惑しながらも愛紗に説明をした。すると愛紗は急に唇を噛みしめ言った。

「くっ……そういう意味だったのか」

「えっ……どついうこと愛紗ちゃん?」

桃香は愛紗が言ったことの意味をきくために問いかけた。

「雅人殿は私をあそこに閉じ込める前に私に言ったのです。「君を選んだら正解だ……まあどうせそうだろうけど」と、つまり最初から私に危害を加える気なんかなかったんです」

「じゃあ私が愛紗ちゃんを助けると分かってて……やったってこと？」

「意地悪なお兄ちゃんなのだ」

「でも……どうしてそんなことを？」

「わかりません……ただ桃香様を試したってことは分かりました」

「そっか……意地悪だなあ〜雅人さん」

三人は三人ともなんとも言えない顔をしていた。そして不意に桃香が

「決めたっ！！絶対に仲間になってもらうんだからねっ！！」

と笑顔で告げた。

s i d e o u t

とある荒野にて

「可愛い娘に嫌われたくなんかねえよバアーカーっ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!畜生っ!!!甘ちゃんて悪いかっ!?!」

という声が響き渡ったというのはまた別の話

《続く》

六話・泳げない？なら手取り足取り……ごめんなさい（後書き）

PVが順調に増えていきます

見てくれてありがとうございます

ちなみに感想とか応援メッセージはデ アとかメデ アみたいに僕のHPを回復してくれます。

そんな作者はメガテン派

ちなみに次のお話には恋姫キャラは一切出ませんので悪しからず

次回もお楽しみに？

七話…お母さんに会いたいっ!! (前書き)

どうも××です

7話です

微妙に地理がおかしいなあと思いつつも書きました。

誤字脱字は報告お願いします。

七話…お母さんに会いたいっ!!

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「起きんかいつ!!このポケがつ!!」

「デゴマスっ!?!」

どうも皆さん。寝てたならニードロップを喰らい、意味不明な悲鳴をあげた空海さんです。

「……………」壁面駄神

「ほう貴様喧嘩を売っているのだなっ!!殺すっ!!微塵もなく際限もなくグチャグチャにしてやるわっ!!」

「落ち着け…お前が先に僕をこの世界に…送っ…て…
……………」

びっくりしすぎて関西弁になりました。まじで……………!?!?

辺りを見回すと、そこには何一つない真っ白い空と血をぶちまけたかのような赤黒い大地…そして鎖が巻き付いた銀色の十字架が乱立していた。

十字架の大きさはそれぞれ違って、それはまるで・・・多種多様な人間みただった。

「ここは？」

僕は元凶とおもわしき壁面駄神に尋ねた・・・すると奴はこんなことをおほざきになられやがりました。

「お前さんの心の風景だ」

「はあ！？」

「お前さんの中にある魂の根源とも風景さ」

そう言われ納得した・・・ああ確かにこれは僕の心の中だな。つてことは・・・

「十字架の数は、197個か？」

「聞くまでもなかるう？そうお前さんが殺した人間の数だけ、ここには十字架が立ち並ぶ」

十字架一本一本が僕が殺してきた人たちつてことか……

「僕の魂の根源とはよくいったものだな」

「ああお前さんは死者に縛られているよ・・・今まで言わなかったが、武器もあんなものを使いおつて・・・」

「・・・」

「>殺された者の怨鎖<は確かに使いがってがよい神宝じゃ・・・しかし鎖だけならまだ違う種類があったじゃろうが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの神宝の力は殺した人間が多ければ多いほど鎖の数と鎖を操る力は増す・・・・・・・・しかし対価は、自分が殺した者の人生を体験し、その時感じた感情も全て見させられる・・・お前さんは何回死んだのか？何回死というものを体験すれば気が済むのか？何回自分に対する憎悪を感じたのじゃ？何故そこまで死者を背負う？」

壁面駄神の問いかけに僕は俯きながら搾りだしたような声で答えた。

「・・・・・・・・そんなんわかんねえよ」

「・・・・・・・・」

「俺は復讐を完遂するためだけに・・・力を得るためだけに・・・人を殺し続けた・・・でも復讐を終えた時、何も残っちゃいなかった。空っぽだった・・・だからせめて自分が自分のためだけに殺した奴らのことだけは忘れなくなかった。それだけは中に入れて置きたかった」

「・・・確かに完遂者となったお前さんはただの抜け殻と大差なかっただろう、けどその中身を死者で埋めるのは間違っている。」

「じゃあ忘れろって言うのかよっ!？」

「そうは言っておらん。忘れるとは言わん、背負い方を間違っなど言っているんじゃない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は壁面駄神を睨みつけていた。駄神は、それを無視して空を・・・いや僕の心の中を見ていた。この白と赤と銀の三色しかない世界を

「それとお前さん」

「なんだ？」

「桃香ちゃんを殺そうとしたじゃろっつ！！私の嫁を殺そうとしたじゃろっつ！？」

僕はあまりの阿呆さ加減にずっこけた。シリアスな感じじゃなかったのか？

「いや確かに思いはしたけど実行してないんだからいいじゃん」

「短絡的に考えて三国時代の王を全員殺せばいいと考えたんじゃろ？」

「ヒュ〜ヒュヒュ〜」

僕は壁面駄神から目を逸らし口笛を吹いて質問を無視した。

「武将たちを殺すなよっ！！全員可愛いんじゃから！！全員私の嫁じゃからな！？殺したら許さんぞっ！！」

「はいはい気をつけるよ」

「ならばよし。言いたいことも言ったし、さっさと起きるがよい」

「何お前僕の夢に介入してきたわけ？」

「うむ暇じゃったし」

「あっそ」

「それと……………」

駄神は僕から目を逸らしつつ、逃げるような体勢をとっていた。

「なんだ？」

「四次元コートの中の食糧・・・」

「何？」

「全部食べちゃった てへっ」

「殴らせるっ！！クソ駄神っ！！」

僕が駄神に飛び掛かるとすでにそこに姿はなく、現実世界だった。くそっ逃げられた。次の邑までどないせえちゅうねんっ！！

何故か関西弁だった

〜一週間後〜

壁面駄神サツっ！！

ブッコロ

今回はう い棒地獄ではなく、カラムー ヨだった。

・・・辛いんですけど、水分はあったからまだいいけど。湖の水めちやめちや入れてったからね。

湖半分になるんじゃないかねえかってぐらい色んな入れ物に入れて四次元コートに入れたし

辛いんだよ・・・辛いし辛いんだよ・・・あつ字が同じだ、ツライとカライ

・・・最後らへん舌が機能してなかったし、ビタミン欠乏してます。

今倒れる直前です。足が産まれたての子鹿並にガクガクです。

あっ・・・ムリ・・・かゆ・・・うま・・・

僕はそうして気を失った。この世界に来て何度目の気絶だろう・・・
壁面駄神殴りたい、殴って泣かしたい。

ああ・・・ブツコロ・・・

side???

娘と二人で隣の邑から馬車で移動している途中で、行き倒れの男の人を見つけた。

黒い外套を纏い、旅をしているようには見えないほど手に何も持っていないのだけれども・・・

というか四肢に枷が付いている……変態さんかしら？

最後にブツコロとか言ってた気がするけど、どういう意味なのかしら？

それに隣の邑から食糧やら何やらを交換した帰りだから、あまり不審者は拾いたくないのだけど・・・美花もいるし

「おかあさん・・・あの人どうするの？」

あつそんな目で見ないで、そんな綺麗な目で見ないで愛しい娘よキラキラした汚れを知らない目で助けるよね？みたいな目で見ないで

「分かったわ助けるわよ、助けます。だからそんな上目遣いで見ないでちょうだい」

「ありがとーおかあさん！」

そう言つて我が愛しい愛娘は私に抱き着いてきた。

可愛いわね〜こんな可愛い娘に男出来たら私は正気でいられるかしら？

死んでしまったあなたの代わりに壁として立ち向かってしまいそうよ娘がほしければ私を倒しなさいとか言つてしまいそうだわ……もちろん手加減なんかしないのだけれども

そんな下らない妄想をしながら、馬車を不審者に近づけた。

「じゃあ美花拾って行きましょう」

「はい」

全く可愛いわね・・・・・・・・もし娘を失望させたら許さないわよ不審者さん

私はそう言っつて不審者を拾い上げ馬車に乗せ、自分の邑に向かった。

side out

・・・・・・・・あつ知らない天井・・・・じゃない知らない女の子

目が覚めると銀髪ショートボブの女の子が僕の顔を覗き込んでいた。

「おかあさ〜ん変態さん起きたよ〜」

ちよつ変態さん!?

待てそこの少女

そうして女の子はお母さん呼びに部屋から飛び出して行った。

少々経つてからお母さんと思わしき、これまた銀髪で頭の後ろにおだんごを作っているナイスバディな人と共に少女が帰ってきた。

とりあえず

「助けていただきありがとうございます」

「あら気にしなくていいのよ。娘が言わなきゃ助ける気なかったもの」

ありがとう少女

お礼に飴かメンマをあげよう。

「であなたは何ものかしら？」

「あっこれは失礼しました。僕は姓は空、名は海、字は戯児です。気安く空海と呼んでくださいっ!!！」

僕は親指を突き出してテンション高めで名を名乗った。

するとそれを見ていた少女が

「わたしは姓は麴、名は礼、字は霜歌です。きやすく麴礼と呼んでくださいっ!!！」

と親指を立てて返してきた。可愛いな持ち帰ろう………はっ
殺気

しょうもないことを考えたらお母さんの方から殺気を感じた。危ない殺される

「私は姓は麴、名は義、字は殷歌よ。よろしく」

………麴義って三国志にいた気がするんだけど？
気のせいだよね？

英語で言つとウツドスピリットだよね!？

「あらどうかしたの？」

「イエベツニ」

麴義が何か感じたのか聞いてきたが無視です、はい。

「であなたは どうして倒れてたのかしら？」

「盗つ人（馱神）に食糧を奪われまして、なんとか水だけで生き繋いでました。であそこで限界がきまして・・・」

「なるほど・・・」

麴義は顎に指をあて何か考えていたが、僕はさっきから彼女が持っている食糧に目がいつてそれどころではない。

「もつもしよかったらそれをいただけないでしょうか？」

「馱目よ」

・・・即答だったorz

つていうか絶対この人DSだ。間違いないよ

「おかあさんっ！！」

「分かったわよ。もう美花ったら優しいんだから・・・はい」

ありがとうございます麴礼ちゃん君の優しさが心に染みます

そう言つて僕にご飯を渡してくる麴義、僕は受け取る同時に食べはじめ10秒で食べ終えた。

「速いわね〜で変態さん」

「空海さんです」

変態じゃねえよっ!!

僕のどこが変態に見えるんだ!?

「その枷は何かしら?そういう趣味の方かしら?」

・・・変態にしか見えないよね確かに

「いえその友達(駄神)に嫌がらせて付けられまして鍵もなく取りようがないので、このままにしているんです」

決してファッションじゃない。

「あらそうなら」伝令ですっ!!」「・・・何かしら?」

麴義が何か聞く前に部屋に兵が飛び込んできた。

「申し上げます!!袁本初様より御命令です。幽州にいる公孫贇の

ところに5000兵で攻め入れのことです!!」

「分かったわ。下がりなさい」

「はっ!!」

麴義は鋭い目をした後兵を下げたため息をついた。

「はぁ・・・本当に袁紹ちゃんは馬鹿よね」

なんか愚痴をいい始めた。

「どうせ公孫贄のところからの賄賂が少ないから少し痛い目を見せてやるか思ってるのでしょうね・・・はぁ」

そう言いながら部屋をでていこうとしたが、麴礼に話し掛けた。

「美花、私は少し戦をするために邑をあけます。その間、空海さんの面倒を見てあげてね・・・はぁ」

今度こそ部屋からでていき、駆け足でどこかに行つていった。

後ろで娘が何か言いたげだったのには、気づかずに・・・

そうしてしばらく経つと、馬と兵たちが邑から出ていく足音が聞こえた。その間麴礼はずっと下を俯いていた。

半刻ほど経つと麴礼は肩を震わせ泣きはじめた。

「……はあやめてくれよ。僕はこんなキャラじゃないのに
そんなことを思いながらどこか諦念した思いで尋ねた。」

「どうしたの？」

「……なんでもないの……ぐすっ」

「なんでもなきやそんな悲しい顔はしないさ」

僕は、笑顔を浮かべながらそう言って麴礼の頭に手を置いた。

「言っでごらん？お兄ちゃんがなんでも叶えてやるぜ？」

「本当？」

麴礼は少し疑わしさを込めた目で見てきたが、関係ない。僕を信じ
ろっ！！

「ああお兄ちゃんは神様の弟子だからね」

「……おかあさんにお守りを渡したかったの」

うんスルーされた。

「……」

「戦で帰ってきて欲しいから、怪我して欲しくかいからお守りを渡
したかったの……」

鞠礼はそう言って俯いて俯いてしまった。

なら

「どうしたい？」

「えっ？」

「鞠礼ちゃんはどうしたいの？」

「わたしは………」

「言っ………」

「……おかあさんに」

「お母さんに？」

「お母さんに会いたいっ！！会ってお守りを渡したいっ！！」

「なら連れて行ってあげよう！！」

「うんっ！！」

僕は鞠礼を肩に担ぎ厩へと走り、馬を一匹拝借し、鞠礼を前に乗せ、荒野を駆けはじめた。

可愛い女の子のためならなんだってするのが男の使命だからね
半刻ならギリギリ戦う前に間に合うはずだっ！！

走れ僕っ！！

ちよつとだけ簡単に僕を信じたことが心配になるけど……まあいいや
可愛いから許す……！

《続く》

七話：お母さんに会いたいわ！！（後書き）

オリキャラが二人でましたね

一人は実際の三国志に出てきます。詳細は次の話で？

もう一人鞠礼は完全にオリキャラです

元になった人はいません

ちなみに鞠義さんも字がなかったので勝手につけました

楽しんでいただけたら幸いです。

お読みいただきありがとうございます

八話：はっ、僕を誰だと思っている？へタレだぞっ！？（前書き）

8話です

今回は短めです

感想ありがとうございます

以後気をつけながら書いてみます？

ではお楽しみください

八話：はっ、僕を誰だと思っている？へタレだぞっ！？

「ねえ……」

「……」

「お兄ちゃん？」

「……」

「迷子になんかなってないよね？」

「……」（滝汗）

「ねえ」

「……すみません」

素直になるって大事ですよ？

みんなのアイドル空海さんです。

前回連れててあげるなどと格好いいことを言い、部屋の前で僕を監視していた兵を振り切り、馬を盗んだにも関わらず迷子になった空海さんです、はい。

なめてました……自分の方向音痴加減をなめてました……
自分の地図の理解度の低さをなめてました

鞠礼ちゃん曰く、ここは向かっていた場所の真逆らしいです……
一刻程経ってから気づきましたorz

正直鬱です。

このままのの字量産機に移行したいぐらい

……はあ

「お兄ちゃんアホなこと考えてないで、急いで！」

「サーイエスサーっ!!！」

何故か8歳の女の子の尻にひかれる僕

あれえ？僕ってこんなキャラだったっけ？

「速くっ!!！」

「はっ!!！」

まあいいやとりあえず急ごう

そう考えて僕は鞠義の元へと馬を飛ばした。

side

鞠義

お馬鹿な主君のせいで益州にいる公孫贄の所に攻め込むことになったのだけれど……まさか待ち伏せされているとはね

「前方さらに右翼より伏兵の公孫贄軍が迫っています!!」

「全軍後方左翼側に下がりなさいっ!!」

「はっ!!」

私は、伏兵により乱れた進軍を正すために、一時後方に下げ攻める機会を待つ。

そして前方と右翼の敵軍が混じると同時に

「騎兵隊前方へ進めっ!!弓兵は援護を」

「はっ突撃っ!!」

「「「うおー!!」」」

こうして公孫贄軍との闘いが始まった。

前方から公孫贄自慢の騎兵隊が攻めてきた。まあこちらも騎兵隊が自慢だから勝負ね

まあ正面からなんて愚は起こさないけどね

「左右に分かれ、囲めっ！！」

真つ正面から攻めてきた公孫贄の軍を左右に展開し囲む。

そして潰す。

さすがに公孫贄の兵たちも予想外だったみたいね。騎兵の特攻力を削り、展開させるなんて普通はありえないことですからね。

ふふっ 囲まれてびくびくしちゃって……甘いわね

「潰しなさいっ！！」

そうして混乱している公孫贄の騎兵隊を潰していると、首筋にチリチリとした殺気を感じ、馬から飛び降りた。

するとそこには、槍を構えた薄い青色の髪をした女が不敵な笑みを顔に貼り付けながら立っていた。

「ふむ……今のをかわすとは、貴女はできる御仁のようですね」「くっ」

この娘相当強いわね……勝てるかしら？

そう思いつつ、私は自分の武器である拐トクマを構えた。

「私は趙子龍、あなたのお名前はなんですか？」

「私は、麴殿歌よ。気安く麴義ちゃんって呼んでちょうだい」

あら空海さんののが移っちゃったみたいね。

「おやその言い回し聞いたことがありますぞ」

あらこの娘が、空海さんに変態な所業を強要した娘かしら？
なら面白いわね、実際にやりそうな顔してますもの。

「そんなことはいいからちやっちゃと始めましょう。愛しい愛娘が
家で待ってるの貴女の相手をしている隙はないわ」
「ふむ。では始めましょう」

そうして私たちは向き合った。

side out

くそっ今思い出したぞ

麴義は、界橋の戦いで趙雲に殺されてしまっただった!!
でもその戦いは黄巾の後だったはずだ!

どうして今現在趙雲と戦っている麴義が目の前にいるんだ!?

これはまずい、まじでまずい

馬を飛ばしようやく追いついたと思ったらすでに鬪いが始まっており、帰ろうとしたら急に思い出しやがって・・・僕の馬鹿っ!!!

最初の方は二人ともいい感じで打ち合っていたが、途中から間合いと速度の差のせいで麴義が押され始めた。

子供の前で、親を死なせるわけにはいかねえよ！！

僕はそう思いさらに馬を加速させ、鞠礼ちゃんを縮こまらせそのうえに覆いかぶさり矢で狙われても大丈夫なように、さらに鎖で盾を作った。

ビビりすぎだった？

僕を誰だと思っていやがる！！ただのヘタレだぞっ！？

くだらないことを考え前を見ると、鞠義の武器は、飛ばされ趙雲に槍を向けられていた。

「私の勝ちですな」
「くっ」

鞠義が悔しそうな顔をしているが、もう少しだから待ってる！

「貴女を今ここで殺すのは惜しいですが、これも武人の務め・・・
覚悟を」

「っ・・・」

趙雲は麴義が目をつぶったのを確認し、槍を構えた。

させるかっ!!

僕は四次元コートから鎖を出し趙雲のロンギry・・・槍に向かって投擲した。

ガッ

「なっ!?!」

見事に槍を弾き、趙雲と麴義の間に割って入った。

「間に合いました」

僕がそういつと趙雲は、眉を潜めながら僕に言ってきた。

「真剣勝負の邪魔をする気ですか？」

「いや僕は邪魔する気なかったんだけど……あの娘がね」

僕はそういつて馬から飛び降りてお母さんに抱き着いている麴礼を親指で指した。

「ふむ、しかし勝負は勝負……情けを与えるのは敗者の誇りに傷を……」
「くだらねえ」……なんだと？」

趙雲は態度の変わった僕を見て警戒をあらわにしつつ、僕の言葉に對して怒気を込めて返してきた。

「くだらねえって言ったんだよ趙子龍」

「なっ貴様っ!!!」

「小さな子供の幸せを……母親との絆を潰してまで優先される誇りなんか、くそくらえだ!!!僕が叩き潰してやるよっ!!!」

僕はそう言って趙雲を睨む、すると趙雲も睨み返してきて、その場に一触即発の雰囲気があった。

「邪魔をするなら殺すぞ？」

「やってみるよ。てめえのくだらねえ信念なんか潰してやるよ」

僕と趙雲の睨み合いは続いたが、公孫賛の軍から撤退の音が響いた。

「貴様の命しばし預けるぞ」

「なめんな、また負かすぞ」

険悪な雰囲気僕と趙雲は別れた

……はあやっちまった。星さんのこと割りと好きだったのに……嫌われたなこれは。

なんか気に入らないんだよね

僕が武人じゃないからかもしれないけど・・・命より大事な誇りなんかあるとは思えない。
生きていればなんだって出来るんだぜ？

死んじやったらそれで終わりだし、何より麴礼ちゃんが悲しむじゃないか・・・

そんなことを考えながら麴義さんと麴礼ちゃんのところに行く

「ありがとうお兄ちゃん」

麴礼ちゃんが太陽のような笑顔を浮かべてお礼を言ってきた。
まあ麴義さんは微妙な顔をしていたが、そんなもの無視だ。

あんな笑顔見れたんだから・・・悪くない結果だって分かったのだから・・・

《続く》

八話：はっ、僕を誰だと思っている？へタレだぞっ！？（後書き）

終わりました

麴義に関しては後悔してませんっ！！

で違う作品を書くつもりです。（話飛びましたね

一応ネギま！で仮面ライダーのオリ主ものの予定ですが・・・グダグダになりそう

予定では今日中にあげるつもりですが・・・人生ままならな
いことも多々あるのでわかりませんwww

誤字脱字については報告お願いします

応援してくださるて嬉しいです

九話・最強なのは美花ちゃん（前書き）

どうも××です。

今回は短めです。

最近色々あって忙しいです

誤字脱字は報告お願いします

九話・最強なのは美花ちゃん

カンツキーン

麗らかな暖かい日差しの中青い空に響き渡るのは……金属音だった。

「はあっ！」

「……………」

「せいっ！」

「……………」

「だあーっ！」

「……………もうやめませんか？」

「はあ……………はあ……………まだよ。まだイケるわ」

「ソウデスカ」

対峙するのはトンファーを構えた麴義と無手の空海である。

無論空海は無手と言っても、自分の四肢に付けられた枷を用いて麴義のトンファーを巧みに受け流し、相手をしていた。

「ハア……………ハア……………いい加減攻めてきたらどう？」

「……………終わりにしません？」

「駄目よ。どちらが敗北を認めるまで続けるわ」

「ソウデスカ」

何故こうなったかと言うと趙雲との闘いで助けたことは感謝しているが、そのあとの台詞が気に入らなかつたらしい。

武人としての自分を馬鹿にされたように感じたとかなんとか

誇りなんかくそくらえなんて言い過ぎたかな……………

そんなこんなで鞠義さんとバトル中の少しダウンー気味な空海さんです。

ちなみに僕と鞠義さんの戦いを見ているのは美花ちゃんだけである。

あの後おかあさんを助けくれたお礼にといって真名を預けてくれました……………可愛いなあ……………持ち帰り……………ひっ！

僕の悪しき考えが分かったのか、急に鞠義さんのトンファーが冴えた、というか僕の鼻の頭を掠った。

あぶねえ笑えなくなるところだった。

にしてもいい加減うざりたいなあ…………でも命の恩人を殴るのも嫌だし

鎖の力を使うのも許されない。

これは鞠義さんの信念で、向かってきているから神宝なんかで倒すのは失礼に値する。

……はあしょうがないか

僕は面倒くさくなったので思考を捨て、右拳を引いて半身に構えた。

「やっと本気がしら？」

「一打だけです。一打で貴女の信念を打ち砕きます」

「そうやってみなさいっ!!」

鞠義さんはそう言って地面を這うような低姿勢で僕に向かってきた。

僕はそれを見ながら鞠義さんが間合いに入るのを待つ……まだだ……まだだ……まだだ……今っ!

僕は引いていた拳を鞠義さんの顔面に向かって突き出した。

決して見えない速度ではない、しかし鞠義さんはそれをかわさずに防ぐはずだ・・・これは信念のぶつかり合いだから

僕が唯一打つと言った一打をかわすわけがない・・・彼女はそういう人だ。

予想通り鞠義さんはトンファーを重ねて僕の拳を防ごうとした、しかし僕は拳がトンファーに当たる直前に拳を開き掌底でトンファーごと鞠義さんをぶっ飛ばした。

僕の信念が生きていればなんでもいいというものなので、今は問題ないはずだっ!・・・多分

飛ばされた鞠義さんは背中から後ろにあった茂みに突っ込んでいたけど、大丈夫だろう。

「今のは少し狡くないかしら？」

ほら大丈夫だったでしょ・・・よかった。まじでよかった。笑えなくなるところだったZE

「一打は一打ですよ」

「はあ・・・分かったわよ。負けを認めるわ」

茂みから出てきた麴義は少し納得出来ないといった顔をして、トンファーをもてあそんでいた。

「はあ・・・疲れた」

「あら本当に？最後以外全然真面目にやってなかったじゃない」

「そんなことないですよ麴義さんの拐めトシフアちやくちや速くて捌くのが面倒で仕方がなかったです」

「割り和本気だったのだけれども・・・面倒な程度で捌けたということね？」

「いえそういう意味ではなく・・・」

「それにどうして武器を使わなかったのかしら？」

「僕は無手の方が強いんです」

これはマジである。元々鎖を使いつつの接近戦が僕のバトルスタイルである。

「そう・・・ならいいわ」

「納得してくれたようで・・・もういいですか、麴義さん？」

「葉でいいわ」

「それは真名では？」

「私の真名を預けるわ・・・負けちゃったし」

そう言っていじけたような顔をしつつ、美花ちゃんの元へと歩いていった。

「雅人お兄ちゃん強いんだね」

美花ちゃんがこちらにやってきた・・・止めてください、そんな『ギンツ』とか効果音が付きそうな目で睨まないのでください。

「ははっ・・・頑張つて修行した・・・というかさされたからね」

「私も修行したら強くなれるかな？」

「あぁきつと僕より強くなれるさ」

僕はそう言いながら美花ちゃんの頭を撫でた。

美花ちゃんはくすぐったそうな顔をしていたが、少し嬉しそうだった。

「で雅人さんはこれからどうするつもりなのかしら」

僕と美花ちゃんのスキンシップを邪魔するかの如く・・・というか実際僕から美花ちゃんを引きはがしたし・・・麴義さんが話し掛けてきた。

「一応陳留に行こうと思っています」

「どうしてかしら？」

「ある人物を一目見たいと思ひまして」

あのドSグルグルレズドリル（曹操）を実際に見てみたかった。

「お兄ちゃんどっか言っちゃうの？」

美花ちゃんが上目遣いのウルウルした瞳で尋ねてきた。
やめて萌死にする。

そして葉さんは射殺するような目で見ないでください。

「すぐにじゃないよ」

「本当？」

「ああ」

「ならその間私のお家に泊まってよ」

美花ちゃん……有り難いんだけどね、君のマザーが僕を殺す一歩

手前だから発言には気をつけて欲しいな。

「おかあさんいいでしょ？」

おっ 美花ちゃんのキラキラ攻撃だ

「ぐっ・・・そうね。 邑にいる間だけ・・・いる間だけ、泊まってもらいましょう」

言外に早く邑からでていけと言っているようなものだった。

ひでえ

「ありがとうおかあさん」

美花ちゃんは満面の笑みでお母さんに抱き着いた・・・恐ろしい娘
っ！！

「じゃあ家に帰りましょう」

「はぁい」

こうして僕は葉さんのお家にお世話になることとなった。

帰り道で美花ちゃんが僕に肩車をねだり、肩に乗せてあげていたら後ろからまがまがしい殺気がぶつけられたのは言うまでもない。

《続く》

九話・最強なのは美花ちゃん（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

美花ちゃん最強ですねWWW

次回のお話はいまだにオリキャラとの絡みが続きますが、そろそろ恋姫キャラもでてくる………はず

頑張っていきます。

次回もお楽しみに？

10話：一休み（前書き）

うんやったよ俺

ついにアホなことした

というか更新遅れてすいません

誤字脱字は報告お願いします

10話：一休み

「舞い上がっていく砂塵」

「さじん」

「絡まる運命を」

「運命を」

「指し示すかのように」

「ように」

「大きく広がる」

「広がる」

どうも今美花ちゃんを肩車しながら邑を歩き回っている空海さんです。

歌を唄いながら回っているんですが・・・美花ちゃんノリノリです。

まあいいや楽しいし・・・

そして何故か邑を回っていると邑の人たちが差し入れをくれます・・・

・なして？

「よお空海の旦那、これ持っていきな」

「あつありがとございます」

「気にすんねえ、麴礼ちゃんにもホレ」

「わ〜いおじちゃんありがと〜」

おっちゃんからりんごを貰いました・・・うむ新鮮で美味い

「シャクシャク」

「シャクシャク」

「シャクシャク」

「シャクシャク」

「美味しいね」

「うん」

美花ちゃん

ちゃんと口抑えて

果汁が僕の頭に垂れてます・・・べとべとです

「あら空海さん、これ持っていきな、美花にもはい」

「あっありがとうございます」

「ありがとうーおばちゃん」

今度は干し肉を貰いました・・・ううんなんでこんなに人気者にな
ってるんだ僕？

「本当にすみません」

「なあに〜あなたのしてくれたことに比べたら全然大したことはな
いさ」

「ええと僕がしたことと言つと？」

「鞠義ちゃんを助けてくれたんだろ？本当に助かったよ。あの娘は
分かってないのさ・・・子供には親はなくてはならない存在だっ
てことがさ」

「ええと」

「何してでも生きて帰るのが大事なのさ、あなたの言う通り誇りな
んかくそくらえってやつだよ」

「はあ」

やめて〜恥ずかしい。その場のノリで言っただけですから〜

「鞠義ちゃんも分かってくれると嬉しいんだけどねえ〜」

「はあ」

おばちゃんとその後他愛のない話をし終えて、その場を後にした・
・おばちゃんの話長すぎ

美花ちゃんよだれ垂らしながら寝ちゃってるし・・・口閉めて下さい

よだれが顔の上から垂れてます・・・髪がぐちゃぐちゃです

本当に勘弁して

とりあえず美花ちゃんを降ろして井戸で頭を洗うことにしました。

「食い逃げだあゝ誰か捕まえてくれゝ」

「天知る地知る人が知る・・・」

うんパピヨンのな仮面をつけた人が何故かいたので、多分手伝う必

要ないな

あんたは恥を知った方がいいとかは言わない

というか見つかったら殺されそうだし・・・

逃げるに限る

美花ちゃんを背負い直して、全力疾走でその場から逃げる

ふっこれなら大丈夫・・・はっ殺気！

ふん横っ飛びで後ろからきた槍を回避する・・・このロンギ スミ
たいな槍は・・・

「見つけましたぞ雅人殿」

「ひっ」

鬼の顔をした趙雲さんでした・・・殺される

目がまじだもん
こいつやる気だ・・・僕を殺る気だ・・・

逃げようとしたら・・・背中に槍の先端を当てられました・・・もう無理ぽっ

真美・・・お兄ちゃんもそっちに逝くからね

真美・・・お兄ちゃんは最期らへんだけ人生楽しめたよ

真美・・・

「何を泣いてるのですかな？」

「いや死に別れた妹に再び会いに行く用意を・・・」

「まだ殺しませんよ」

まだかよ!?

「何の御用でしょうか？趙雲さん」

「ふむ、星とは呼んでくれないのですな」

「はっ何をおっしゃるのやら呼ばれたくないでしょ？」

やめてそんな槍でツンツンしないで〜

「ええまあそうですが・・・微妙なところですね」
「はあ・・・」

何が微妙なの？
僕の顔？

「あなたのこの前の台詞を許したわけではありません・・・しかしあなたの武には敬意を評しているのです」

「なるほど・・・」

正直どうでもいい

とっつかなんだこの展開は!?

今回はタイトル通り一休みじゃないのか!?

僕と美花ちゃんのキャラハウフフな日々を書くんじゃないのか!?

畜生作者め！！

僕の平和を返せっ！！

あっちよっ槍でグリグリしないで普通に刺さってるから・・・血が
出てるから！！

「私は聞きたいことがあるのです」

「なんですか？」

「あなたはあんなに素晴らしい武を持っているのに・・・何故あの
ようなことを言うのですかな？」

武というかズルで勝っただけどさ・・・

「いやその・・・」

言わなきゃ駄目なのか？

ちよつ槍でぐさつくぎつしないで・・・笑えないからっ!!」

言っから言っから!!」

「あんたは殺された方の家族の気持ちを考えたことはあるか？」

「・・・ありませんな。一度して考えたことすらありません」

「殺す側は楽だよ。ただグサツと刺して、はい終わりだからね。まあ罪悪感とかはあるだろうけど・・・そんなのいやっだっている」「確かに私も罪悪感などはありませんな、悪党を殺しているわけですから」

「関係ないさ、どんな悪党やどんな患者だつて家族や友人なのさ・・・殺された方の親しい人や家族がどんな気持ちになるか分かる？その人達にとつて死は純然たる終わりだ・・・二度と話せない、二度と抱き合えない、二度と愛せない・・・そんな暖かさを奪ったやつを許せるわけがない、狂うような憎しみが続くんだ」

「・・・」

「そして復讐をしようとする・・・そんなくだらないことが起きて、そんなくだらない誇りで人が死ぬならそんな誇り全くいらない・・・僕はそう思う、それに・・・」

趙雲は黙って僕を見つめている

「こんな可愛い娘から母親を奪う気かい、趙子龍？」

僕はそう言っつて僕の頭を枕に頭の上で寝ている美花ちゃんを指差した。

この状況で起きないとは・・・つわものだな美花ちゃん

趙雲さんは何か考えるようなそぶりをしている・・・はぁ真面目に答えるなんて僕らしくないな

愛紗と分かり和えないと言っつた理由はここにある。

愛紗は賊や悪党は人間じゃない・・・そう思っつている
いや思い込んでいるのかもしれないな

だが違う賊や悪党だつて人間で守りたい友人や家族、愛する人達がいる・・・それを考えずに正義という愚かさで殺すのは大いに間違っつている。

僕が悪党の息子だからそう思えるのかもしれない・・・皮肉なもんだよ

それに死者の重さは理解したかもしれないが、死者の思いを理解しない奴と相いれる気はない・・・まあ僕が死者を背負いすぎているからね

そんなくだらないことを考えていると、いつの間にか趙雲がめっちゃくちゃ近くに寄っていた・・・近い顔近いっ！！

あんた性格はあれだけど、顔は可愛いだからやめなさいっ！！

そして不意に頭を下げてきた

「今回は私が間違っていました・・・謝罪させてはくれませぬか？」
「えっいや」

「私はただただ人を殺し続けた・・・そこに相手を思う気持ちなど微塵もなく・・・貴方に言われて気づきました。賊も人間であるということに・・・」

当たり前のことなんだけどね・・・なかなか気づかないんだろうねこの時代の人達は・・・

「だからこれは謝罪を込めて・・・」

趙雲は顔をあげ、僕に近づき僕の唇を奪っていった・・・ちよっプ
アーストキス！！というか男前すぎるからっ！！

それに長いつ！！

ようやく離された唇を触っていると、趙雲は舌なめずりをして、微笑んだ・・・怖っ！！

「惚れました」

「はっ！？」

なんか言い出したよ、この人！

「貴方の武そして何より貴方の心に惚れました・・・今はまだ貴方の近くにいることはできません・・・しかし必ず貴方の横に立ちにいきます・・・それまで待っていてくださいね？」

そう言って趙雲は僕の頬に口づけをして去っていった・・・えっあれいつフラグ立てた僕？

10話：一休み（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

今回は、なんか趙雲さんとのフラグが立った空海さん

いやぁ微妙な出会いのような気もするけど・・・まぁいいか

俺作者だし！！

なんか壁面駄神みたいなことを言ってしまったぜ

今回は・・・まだ考えてないです

次回もお楽しみに？

11話：二休み・・・あれ？（前書き）

なんか前回から話数表示が変わってます・・・間違えましたorz

今回は短め、うん

ネタが浮かばなかった

誤字脱字は報告お願いします

11話：二休み・・・あれ？

「ライトアップのブリッジは？」

「ねえ何するの？」

「異次元行きのダイヤモンドアドベンチャー」

「ねえ？」

「こつちとあつちのミステリ？」

「ぶう？」

「繋げて見せてよシークレットカクレン・・・痛い！！髪引っ張っちゃ駄目だよ美花ちゃん」

「だってお兄ちゃんが美花の話聞いてないんだもん」

どうもすっかり頭の上が定位置になった美花ちゃんを肩車している空海さんです。

随分と美花ちゃんに懐かれまして、この前なんか葉さんの前で「美花お兄ちゃんのお嫁さんになる？」

なんて言ってくれましたからね！もちろん僕はそのあと殺されかけましたよ

当たり前じゃないですか！分かりますか？

トイレ入ってる時に外から矢がとんでくる恐怖を！

分かりますか？

食事に致死性の毒を仕込まれる恐怖を！

ああ思い出したら泣けてきた・・・ぐすっ

ああもう真美の元に行きたいです

「あつ空海の兄ちゃんだっ！！」

「あつホントだっお兄ちゃんも遊ぼっ」

美花ちゃんと邑を回っている間に、邑の子供たちとも仲良くなりま
した。

タケトンボとかコマとかタケウマを作って、あげたからね

「いいよ。何して遊ぶ？」

「鬼ごっこ！！」

「かくれんぼ！」

「ええっタケトンボがいいよっ」

色々遊びを教えてあげただけど、気に入ってくれたようだね

にしてもかくれんぼは嫌だな〜トラウマをえぐられるZ E

いつも僕が鬼になると帰るから・・・いつも・・・いつも・・・

・

過去を振り返り哀愁を漂わせていると、結局鬼ごっこになっただらしい

142

一人華蝶仮面ごっこって言ったやつがいましたが全力で無視しましたっ！！

小さいうちからあんな変態を参考にしちゃいけません！！

はっ！？殺気だと！？

あぶねえパピヨンな変態さんが来たかと思ったぜ

まあとりあえず怖いことは忘れて、子供たちと遊ぶことにする

ちなみに僕はいつでも全力ですっ！！

子供だからといって手加減する気などないわ！！

周りの大人が僕を見て軽く引いて失笑していようと関係ない！！！！
・多少傷つくけど

それでもこの邑の人はみんないい人です！

でもまあ何故か兵士には嫌われているんだけどね

なんでだろう？

なんかしたかな僕？

まあむさ苦しい野郎なんかと仲良くなっても嬉しくないから別にいいけど・・・

葉さんの兵士は女の人いないからね

楽だよ

そんなしょうもないことを考えていると・・・

前方が騒がしかったので野次馬根性丸だして近づいてみると・・・

変態がいた

何の躊躇いや迷いもなく変態と呼べる存在がいる・・・むしろ化け物

モミアゲをのばしみつあみにしりボンで纏めた、あごひげを生やしたスキンヘッドの変態がいた・・・というか貂蟬

思わず

「南無大慈悲救苦救難広大靈感 観世音菩薩 摩訶薩

南無仏 南無法 南無僧 南無救難観世音菩薩

娼姪とおん 伽羅伐た 伽羅伐た 伽羅伐た 伽羅伐た 伽羅伐た

娑婆訶

天羅神 地羅神 人離難 難離身 一切災殃化為塵

南無魔訶般若波羅蜜」

お経を唱えてしまった。

「がはっ……ぐっ力が……」

おお聞いている！

さすが某地獄先生のお経……化け物には相性抜群だな！

「なわけないじゃない！」

「なに妖怪めっ！！」

臨兵闘……」

「そっちも聞かないわよ！！！」

「なら……喰らえ鬼の……妖怪じゃないわよ！！」……ち
っ
っ

最後は鎖で縛って馬で市中を引きずり回ってやるつもりだったのに……
……残念だ

「で何の用だ妖怪みつあみ変態マツチヨ」

「……まあいいわ」

事実だろうか

「分かっているとと思うけど今日はあなたに会いに来たのよ」

分かってるよ・・・死ぬほど会話するの嫌なんだから早く喋れ
元の世界だったらお前と喋っていると誰かに見られただけで自殺
もんだから

「あなたは死ぬはずだったあの人の運命を変え、生き残らせた・・・
後悔はないかしら？」

「そんなもんあるわけないだろ・・・生かしてする後悔なんざ僕は
しない」

「そう・・・ならいいわ。先に言うておくわ・・・あなたのせいじ
ゃない」

「なにがだ？この変態くそみつあみマツチヨ」

「・・・今は言えないけどいつか分かるはずよん」

キモい・・・まじでジェノサイドしたい

「そうか・・・でもお前がきたってことは、僕は北郷くん的存在な
のか？」

歴史を大幅に変えたら消滅？

「いえ違うわあなたはご主人様とは全く別の存在よん．．．言い方としては悪いけどご主人様とは格が違うの」

「はあ？」

「ご主人様は人間、あなたはある意味半神なのよ」

「Ha？頭腐つたかくそマツチヨ？」

「口が悪いわね．．．あなたは死んだあと神様と暮らしてたわよね？その間ずっと神様の存在にあなたの存在が侵され、存在が上書きされたのよ」

つまりウィルスみたいなもんか．．．さすが壁面駄神うざさが半端ないな

しねばいいのに．．．

「だから消滅することはありえないわよん」

「そうか教えてくれて助かった．．．悪いが目と脳みそが腐り落ちそうだから早く失せてくれ」

美花ちゃんに至っては見ただけで気絶したし・・・

「扱いひどくないかしらん？」

「僕は神に対してもこの対応だ!！」

「.....」

去っていく貂蟬の背中に向かって中指を立て、美花ちゃんを起こす。
・・・トラウマが残らないといいな

「あれ?」

美花ちゃんは変態を見たショックを忘却という術で自己防衛したよ
うだ・・・賢い選択だな美花ちゃん

そして再び邑の子供たちと遊び始め・・・最終的にはかくれんぼを
して、はぶられたorz

《
続
》

11話：二休み・・・あれ？（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

今回は変態さんが登場しましたが・・・次週は少しだけ暗いお話

次回もお楽しみに？

12話・完遂者は至りて回帰する(前書き)

どうも××です

今回はわりと鬱です

うんやっちやっ たかなあ〜という感じがありますね

誤字脱字は報告お願いします

12話：完遂者は至りて回帰する

僕はただ憧れる

普通の世界を

両親と妹と笑いながら生きていく日々を

友達と他愛のない話をして過ごす日々を

愛する恋人と甘い蜜事を語り合う日々を

僕は欲した・・・しかしそれは不意に崩れ

僕は俺となり

身を朱く染め歩く日々が続く

その身に宿るは紅蓮の業火のみ

その身に宿るは極寒の氷河のみ

その身に宿るは死者の束縛のみ

俺は死者に縛られた復讐者だった

俺は死に、新たに僕となった僕は前の世界で出来なかった日々を楽しむ

美花ちゃんと戯れる日々を

葉さんにからかわれる日々を

邑の人々と笑い合う日々を

子供たちと遊び合う日々を

そんな日々が当たり前だと思えた・・・だけど

僕は死者に縛られた完遂者だった

死者を背負い死者と共に歩いている僕が、そんな生活を続けられる
はずがなかった・・・そう楽しい現実とはガラスよりもなお脆く崩
れやすい。

僕の現実はすでに崩れ落ちた。

目の前に広がるのは焼き払われる邑

ちょっと前まで人々が笑いあい、子供たちが戯れていた邑

葉さんの死を笑う

美花ちゃんの生を笑う

「お・・・兄ちゃん？」

美花ちゃんは笑っている僕を見つめる

そして串刺しにされた母を見つめる

そして助けられた自分を見て呟く

「こんなことになるなら・・・助けてくれなければよかったのに・・・」

僕は笑う

子供にさえ気づかれた

僕が嫌われていた理由はtoo easyだ

アツハハハハハハ

邪魔だったから

邑を襲って食糧や金品を奪うのに

僕は邪魔だったから

笑える

最高に笑える

だから僕が邑を出ている間に襲った

美花ちゃんに襲い掛かり殺そうとした

葉さんを脅迫し抵抗されないうちに殺した

けれど美花ちゃんは僕に助けられた

笑えるほど無意味だけど

兵士たちは僕が笑っているのを見て襲い掛かってくる・・・狂った
と思っているのかな

僕はね

元から狂っているんだよ

僕はコートから鎖を出す、いつもの死者を縛る銀の鎖ではなく

生者を刻む朱い鎖を

《捕らえられぬ血鎖》

太陽を透かすような朱い色をした鎖を

その鎖は名前の通り何物も捕らえることは出来ない……ただ切り刻む

触れたものを血まみれに

巻き付かれしものを肉塊に

代償は僕の血
血を流すために血を流す

一人二人……どんどんバラバラになっていく

鎖を振るうたびに何十人も人間が悲鳴をあげ、助けを求め死んで

いく

善悪も関係なく

心の中に銀の墓標が乱立していく

3 1 4 本目の墓標が僕の心に突き刺さる・・・魂を嘲笑うかのように

4 2 8 本目の墓標が僕の心に突き刺さる・・・死を笑うかのように

5 4 2 本目の墓標が僕の心に突き刺さる・・・生者を憐れむかのように

6 3 8 本目の墓標が僕の心に突き刺さる・・・僕の生を笑うかのように

まだまだ足りない

僕は死者で心を満たしている

朱い鎖で兵士たちをバラバラにしながら笑う

僕を縛る死者が増えていくことを

799本目の墓標が立つと、全ては終わっていた

そこにあるのは血と肉と廃墟

生者は僕と美花ちゃんのみ

美花ちゃんは虚ろな笑みを僕に向ける

「ありがとう……お兄ちゃん……」

そう言つて美花ちゃんは落ちていた剣を拾い自分の胸に突き刺す、
母の元に向かうために・・・

僕はそれを黙つて見つめる

そして鎖を振るう

800本目の墓標を得るために

僕の心には銀の十字架が立ち並ぶ
僕の死を待つように・・・

僕は笑いながら、意識を失つた。

s i d e ? ? ? ?

私たちが襲われているという邑に着いた時、すでに全てが終わっていた

私は助けられなかったという悔しさとこの場の奇妙さに対する疑問を重ね持っていた・・・死体が多すぎる

そして分かった邑の人だけではなく、邑を襲った賊まで死んでいるのだということに

その時邑の奥の方から笑い声が聞こえた・・・

行ってみると朱い鎖を持ち、黒い外套を羽織った男の人がいた。

男の人は周りを見て爆笑しながら倒れた、私は急いで近寄り助け起

こす。

気を失ったようだ・・・私は男の人を背負い自分の邑に帰ることにした。

せめてこの人だけでも生き残って欲しかったから・・・

今は一緒にいない親友と似た境遇になった男の人を助けるために・

s i d e o u t

そうして完遂者は再び生を永らえ、また運命に笑われる

一度死の運命から助けたものを再び運命に殺されたものを助けた無意味さを

助けたものに無意味さを笑われ、自ら命を絶たれたことを

彼は笑う、自分の運命というやつを

《続く》

12話：完遂者は至りて回帰する（後書き）

まあ楽しんでくれなかったと思います

僕自身も書いていて決して楽しいものではありませんでしたからね

人というのはなかなかおかしい生き物で、本当に悲しいときは全く泣けません

むしろ笑ってしまうらしいです

怒りが沸くのもなかなかないでしょうね

目の前の現実が受け入れられないのだから

とまあ暗い話になりましたが、今回はどうしても葉さんには死んでもらう必要がありました

主人公に運命は甘くないということを知ってもらったために

美花ちゃんを殺したのは・・・

その場のノリでしたorz

でもまあ死んでしまったキャラはあとがきに作者と対談という形参加させていく予定です

では次回をお楽しみに？

ちなみにネタバレになります

最後に主人公を拾っていったのは

典章ちゃんです

13話・復讐者は笑いてまた相成る(前書き)

うんまたやっちゃったな

シリアスシーンぶち壊し・・・はいごめんなさい？

誤字脱字は報告お願いします？

13話：復讐者は笑いてまた相成る

夢を見る

それは僕が殺した人達の人生である

全員最期は僕に切り刻まれ死んだ

その時の恐怖怒りを感じる

その人の感情を全て感じる

僕が俺で僕が私で僕がわしで僕がうちで僕が・・・

色々な人の記憶を追体験して自分を失いそうだった

そしてそのなかでも何より辛かったのは最後の美花ちゃん
の記憶だった

笑いあっていたときの歓喜と母の死を見つめたときの絶望の差が辛すぎた・・・一番最後が一番僕の心をへし折ってくれた

今僕は横になっている・・・たぶんまた誰かに生かされたのだ。

傑作だ

最初は殺すべき相手に生かされ

次は死んだのに神に新たなる生を与えられ

最後は野垂れ死にすると思ったら誰かに助けられた

三度目の正直かと思ってたんだけどなあ・・・

正直死にたい

何もしたくない

ただ死にたくても死ねない・・・

起き上がり四次元コートからナイフを出し、自分の首に突き刺そうとするが

手首に付けられた枷が引つ張られ、僕の死を拒絶する・・・ふざけんなよ

どうしろって言うんだよクソがつ!!

せつかく生きてても悪くないと思えたのに・・・人生を楽しく感じたのに・・・クソクソクソクソクソクソクソクソクソクソクソつ!!

僕は自分を省みない強さで頭を掻きむしる

ああいらつく!

だから嫌いなんだ人間なんてっ!!

うなだれていても始まらないので、とりあえず立ち上がり部屋を出ようとする。

・・・気分転換も必要だな

まあそう簡単には変わらないとは思っけどね

外に出ようとすると、逆に扉が開き僕の鼻を襲撃した・・・ぐっまたシリアスパートをぶち壊しやがって

鼻を抑えて扉を開け放った相手を見ると・・・緑色の髪を持ち、その前髪を青い大きなリボンでとめている少女、典章ちゃんだった

「あっ・・・すみません」「気にしないでいいよ・・・助けてくれてありがとうね」

僕は笑いながら話し掛ける。

「あっ・・・いえ気にしないで下さい。・・・それで悪いんですが、どうしてあんなっていたかを教えてくれませんか？」

「あっ」

僕はポツポツと話した・・・まず邑でお世話になっていたこと、そして邑が邑の兵士たちに襲われたこと、でそいつらを僕が皆殺しにしたこと

典章ちゃんは邑の兵士が邑を襲ったことに驚き怒りをあらわにしたが、僕が皆殺しにしたと聞き今度は呆然としている・・・やっぱり僕雑魚に見えるのかな？

僕は微笑みながら自己紹介をすることにした。

「そつえば名乗ってなかったね。僕は姓は空、名は海、字は戯児だ。気安く空海と呼んでくれ」

「あっはい・・・典章です」

典章ちゃんは不思議そうな顔で僕の顔を眺めてくる・・・なんだろう？

「じゃあお世話になってばっかりだと悪いからそろそろおいとまするね」

そう言ってでていこうとすると・・・

「まっ・・・待ってください！！まだ病み上がりなんですから寝てなくちゃ駄目ですよ！」

「いや大丈夫、見てくれとは違ってわりと頑丈だからさ」

僕は冗談めかして笑いながら言う

典章ちゃんは訝しげな目で僕を見てくる・・・何故？

「それにここにいたら迷惑になるからね」

そう言って典章ちゃんの頭を撫でて今度こそ出ようとするが・・・
典章ちゃんに腕を捕まれ引っ張られた。

「・・・駄目です」

典章ちゃんは小さな声で僕を引き止める・・・いやまじでなんでですか!?

余りにも不明すぎるので尋ねる

「なんで？」

すると典韋ちゃんは震えながら瞳に涙を溜めた目で

「空海さんが大丈夫そうじゃないからです」

困ったなあゝ全然怪我とかしてないのに・・・心配性なのかな？

「大丈夫だつてば怪我とかしてないし・・・」

「身体じゃないです！！・・・空海さんの心を心配してるんです」

典韋ちゃんは俯き涙を流しながら言ってくる

「大丈夫だつてば・・・」

「嘘だつ！！」

・・・ひぐらry

「大丈夫なら・・・そんな笑い方しないでくださいよ・・・大丈夫なら・・・泣きそうな顔で笑わないでくださいよ」

「・・・・・・・・・・。」

僕は黙ることしか出来なかった・・・自分ですら気づけない・・・いや隠していた感情の変化を指摘され、驚き・・・不意に瞳から雫が垂れる。

178

「あれ？」

僕は呆然とする、泣くつもりなどなかったのに・・・死者にあぐらをかいて座っている僕が泣く権利などないはずなのに！！

「あれ？えつとまんない？」

僕は戸惑った・・・何十年ぶりの涙にどうしていいか分からず慌て

ふためく

するとふと顔が何か暖かいもので包まれる・・・典章ちゃんに抱きしめられていた。

「悲しかったら泣いていいんですよ？辛かったら泣いていいんですよ？」

月並みでべったべったな台詞なのに・・・

いつもなら鼻で笑うはずなのに・・・

僕は泣いてしまった・・・自分より歳の低い子供の胸の中で

さすがに声は出さずにただ涙を滂沱する・・・ひたすらに流れおちてくる蛇口でも壊れたのかな

僕は恥ずかしくなったので、典章ちゃんをやりわりと押し僕から引き離す

典章ちゃんはまだ不安そうな顔をしているが、今度こそ微笑み頭を撫でて

「大丈夫だよ」と言う。

典章ちゃんも僕に微笑みを返してくれた・・・可愛いなあ〜お持ち帰りしたいなあ・・・あつ僕が帰ってきてる。

さすが美少女パワー侮れないなあ〜などと自分の中で自分におどけていると・・・

「出ていつちやうんですか?」

上目遣いで引き止められたので・・・滞在することにした。

「確かに恩返しもせずに出ていくのはよくないね」

「いえそんなつもりじゃ……」

あわあわと慌てる典章ちゃん……可愛いなあ

「冗談だよ」

典章ちゃんの頭を撫でる……最高だなあ

典章ちゃんは赤くなり俯いてしまった。

典章ちゃんに説得され死ぬのは止めたが、何をしていいかはいまだに分からない……僕はどうすればいいのかね？

「全く爆笑もんだよ畜生」

そんな僕の独り言がああ壁面駄神に届いたかは、分からないがきつと手助けはしてくれないだろう……そう思いつつ口の端をあげて

皮肉気な笑みを浮かべる。

まあ見てろよ壁面駄神

僕はそれなりにこの時代を生き残ってみるよ

とりあえず典章ちゃんとの生活を楽しもうかな・・・

こうして僕は典章ちゃんとの出会い、お世話になることとなった。

《続く》

13話：復讐者は笑いてまた相成る（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ちょっとネタに走ったシーンがありますがスルーしてくれると嬉しいです

本当にシリアスシーンが苦手な作者ですいません？

ちなみにおまけコーナーの作者対談は次回からです

質問もお受けしております

次回もお楽しみに？

14話：迫りくる悪夢たち・・・（前書き）

更新遅くなつてすみません

誤字脱字は報告お願いします

14話：迫りくる悪夢たち・・・

キラキラと輝く太陽の中僕の前には地獄が広がっていた・・・

「一つ！輝く筋肉で！！」

マッソウ

「二つ！ほとばしる情熱で！！」

ムキッ

「三つ！伝えてみせよう漢女の心！！」

ペタッ

・・・死ねばいいのに

というか三番目

お前漢女じゃないし

さらに誇るような筋肉も胸もないだろうが・・・

目の前で謎のポーズをとる変態（化け物）+妖怪ヌリカベ

変態Aは右斜めに右手を伸ばし、右手と左足が一直線になるようにしている

変態Bはその左右対称型

で妖怪はその二人・・・二匹の肩に足を乗せて、エックスみたいな格好をしている

どこの後 園遊園地で僕と握手な戦隊なのだろうか

「「「三人合わせて・・・人外シスターズ!!」

・・・って誰が人外やねん!!」」

果てしなくウザい

とうにか間違はなく三人・・・三匹とも人外だから特にヌリカベも
とい壁面駄神

あんた一応神でしょうが・・・

「「「イエイ！」「」」

三匹は出来に満足したらしくハイタッチしている・・・変態Aもとい貂蝉と変態Bもとい卑弥呼（ガ ダムみたいな髭をした白髪のオッサンもとい化け物）が腰をクネクネと振っているのがなお質が悪い

一緒に歩いていた典章ちゃんが某星白金なスタンドを受けたかのよ
うに固まっている・・・まさか時を止められるようになるなんて

典韋ちゃんが驚きのあまり思考停止ならぬ活動停止か・・・

さすが化け物だ

と感心しつつ

普通に無視をして、典韋ちゃんの腕を引っ張って歩いていく。

後ろから「待つのじゃ、ドS鎖緊縛野郎!」とか聞こえるが普通に無視

こんなところに偉大で賢く気高く美しく華麗で麗美で崇高な神様（笑）がおられるわけがない

・・・あぁもちろん神様（爆）がいるなんて考えるだけ愚かなことで僕には到底出来そうにない

だから無視しなくてはならない・・・いやしなければいけないのだ
!!

などと現実からの逃避と現実で化け物たちから逃避を重ね合わせた
現実逃避をしつつ考える

まじでどこに逃げよう

後ろから笑い声と共に迫りくる化け物たち・・・くっキモいキモす
きる

まじで人間じゃねえ

多分地 先生ぬ べゝとかに出られる(作者はぬゝが大好きで
ある)

知ってた?

アニメ版と漫画版だとお経が違うんだぜ!? (作者は両方暗記しています)

更なる現実逃避を重ねても迫りくる果てしない悪夢のような現実という名の変態たち

腰を振りながら追いかけるなっ!

活動を再開した典章ちゃんが気絶しただろうが!!

典章ちゃんの影響に多大なる影響をもたらすからやめろっ!!

駄神は荒ぶる鷹のポーズで貂蝉の頭の上に立つのを止める!

ワンピースで思いっきり片足あげるな!!

下品な黒いヒモパンが見えてるから

外見にあわせてクマパンでもはいてろよ!!

しかも爆笑しながらくんなっ!

ああ典章ちゃん気絶してて邪魔くさい

しょうがないから典章ちゃんを背負っ

まだ捕まっではいけない・・・そんな気がするのだ

主にアツー的な恐怖を

くそっ捕まったら間違いなく・・・ヤラれる

人相手に使うのはまずいアレを使うか？

あいつらなら生き残りそうな気がするんだけど

あつでもまだ《捕らえられぬ血鎖》を返してもらってなかったな

アレをやるには最低5種類は必要だし・・・くっなら

僕は四次元コートから新たな紫色をした鎖を出す

名を《触れることなき鈍鎖》

その力は鎖に触れたものを吹き飛ばす

鎖に当てられたものは掠った程度でもダンパーカーに撥ねられたぐら
いの衝撃を感じるというものだ

ちなみに副作用は使っている間
触れている部分に激痛が走るだけ・・・痛みぐらいなら今の状況を
回避するためには安いものだ

その鎖で普通に貂蟬と卑弥呼の顔を狙う。顔を狙う。

大事なことだから二回言ったぞ

あの気持ち悪い顔を粉碎する。

駄神の方は狙うだけ無駄

ダンプカーごときじゃきかないから・・・あいつまじで頑丈すぎる

「くたばれっ!」

躊躇いも躊躇もなく狙う・・・チツよけやがった。

「甘いわっ!」

息の合ったコンビネーション

上腕二等筋を強調するように避ける

まあ第二弾には気づいてないが・・・

ドンッ！！

車がぶつかっただよ様な音共に貂蝉と卑弥呼が崩れ落ちる・・・勝つ
たな

鎖がぶつかったのは股間
漢女なら潰れてようが粉碎してようが問題ない

泡吹いてやがる

えまあ

僕は崩れ落ちた二人を普通に見捨てた駄神を見る。

「何のようなんだ？」

「いや暇だったからちよつかいをだしにきただけなのじゃ」

無言で四種類目の鎖を出そうとする

「ちよっそれは駄目なのじゃ!!」

「チッ」

さすがに僕もこれを使うのは嫌なので舌打ちをしながらもしまい、
駄神を睨む。

「で何？」

「いやまじで暇つぶし・・・まあ星ちゃんをおとしたお前さんに嫌がらせをと思っただけな」

「お前帰ったらエロゲーのデータ全部消してディスクも割るから覚悟しとけよ」

恥ずかしいことを思いだしそうになったので脅す

「なっ・・・そんなあの子たちに罪はないのじゃっ！！香帆ちゃんや香純ちゃんやまゆっちやクリスに罪はないのじゃ！！」

やってるゲームが分かるから名前を出すな名前を

「それはともかく・・・お前さんはどうするのじゃ？」

「何が？」

「まだこの世界に居たいか？」

そんなことをきくために化け物を二匹召喚したのかよ

「うむなんか召喚したくなつたのじゃ」

.....

「聞かなくても分かるだろ？」

「ああ分かるとも……しかし」

「ん？何？」

なんかシリアスなのか？

こんな序盤から崩壊しておいてシリアスに移るのか？

「聞かないと我の出番がないのじゃっ!」

よかった・・・ギャグパートだ

「ハイハイ、まあともかく僕は残るよ。まだやりたいことがあるしね」

神(という名の壁)は薄い胸を張りながらニヤリと笑う

「お前に吠え面をかかせたいからな!」

お前の思い通りになんかなっただまるか

壁面駄神め

葉さんが死ぬのが運命だったならお前が作りだしたってことだろ？

ならお前が作ったもん全部壊して

くだらない運命なんかぶち壊して

お前に吠え面かかせてやる

今に見てろくそ壁面駄神め

僕はニヤニヤしながら消えていく駄神を見据えて言う

「待ってるくそ駄神

絶対一発殴って泣かしてやるからな!!」

僕の進むべき道は決まっている

こんな世界めっちゃくちゃにしてやるぜ！

《続く》

14話：迫りくる悪夢たち・・・（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

ちなみに葉さんとの会話はまた延期となりました

理由？

本編作るだけで手一杯だったからorz

というか貂蝉と卑弥呼が出るとどうしてもギャグに移行しますね

あんまり出したくないんで

会話はさせませんでしたwww

次回は考えてませんw

ですが次回もお楽しみに？

15話という名の流琉の空海観察日記！（前書き）

15話です

時間が経っているわりには本編が進んでいませんorz

そして何より黄巾の乱が起きていないという

さすがご都合主義

誤字脱字は報告お願いします

15話という名の流琉の空海観察日記！

どうも典章です。真名は流琉です。

今日は最近拾ってきた空海さんの行動について私が付けた記録です。

空海さんと出会ったのは、死にかけた空海さんを拾ったことから始まりです。

最初私達は隣の邑が襲われていると聞き皆で駆け付け邑を見るとすでに邑は壊滅状態になっていました。

そして邑の人に生存者がいないか探し回っているときに見つけだしたのが空海さんでした。

少し怪しい身なりをしていたので大人は連れ帰るのを嫌がりましたが、なんとか説得して私達の邑に連れ帰り身体を洗ってあげて何日か看病をしました。

起き上がった空海さんに話を聞くと、すごく腹が立ちました。

邑を守るべき兵士さん達が邑を襲うなんてひどいと思いました。空海さんが全員倒してしまっただらいいです・・・そんなに強そうに見えないのに、とても驚きました。

そして色々あって邑に残ってくれることになりました。

泊まる場所はお母さんとお父さんに私の家に住ませてあげるようお願いすると

お父さんはすぐく嫌そうな顔をして、「流琉！あんな男のどこがいんだ！？駄目だぞ！お父さんは交際なんて絶対に認めないからな！」とか言っていました。

お母さんにどこかに連れていかれた後ボコボコに腫れた顔で頷いてくれました。

空海さんにそれを話すと苦笑いを浮かべて、何か仕事をさせてくれと言ってきたので

別に働かなくても大丈夫ですよと言ったら
「・・・ヒモみたいで嫌だ」とか俯き加減で何かぶつぶつと言っています。

しょうがなくマキ割りをお願いしたのですが、それだけじゃ嫌らしく何か他にないかと聞いてきたので買い物を頼みました。

空海さんは嬉しそうに邑の中に走っていきました、小声で「僕はヒモじゃない僕はヒモじゃない」と言いながら駆け抜けていくのが聞こえました・・・そして何故か帰りにたくさんの子供たちを引き連れて帰ってきたので、どうしてこうなったかを尋ねると

空海さん曰く「途中で遊ぶ玩具をあげたりや遊び方を教えたらこうなった」と楽しそうに笑いながら言ってきました。

今では空海さんは邑の子供たちの人気ものです。
よく邑で遊んでいるのを見かけるのですが、誰かが華蝶仮面ごっこをやりたいと言うととうずくまって地面に手と膝を付け「勘弁してください」と言う光景をよくみます。

何故なのでしょう？

この前一緒にお使いに行つたのですが・・・その時のことをよく覚えていません。

途中まで楽しくお話ししていたのは覚えてはいるんですが、何かがあつて家に帰つてくるまでの記憶がありません。

空海さんにそれを話すと「小さな子はいつらの存在を受け入れられないのか、記憶をなくさせるとは・・・
まあトラウマにならないだけましなのか・・・」と言つていたので、何かがあつたかは教えてくれませんでした。

一緒に肉まんを食べて以来、ここ最近は何やら何やらを持ち込んでいました。

部屋に入る前に「なんであんまんがねえんだよ。僕はあんまん派だつて言つただろうが駄神め」とか叫んでいました。

部屋から甘い匂いがするので何をしているかとても気になりました。

そうしてようやく出てきたと思つたら肉まんを持って出てきたので、何をしてたか尋ねると「いいから食べてみて」と言われ肉まんを渡されました。

話を聞いたかったのですが、少しお腹も減っていたので肉まんを食べると・・・それは肉まんじゃありません、中身が肉の餡ではなく小豆でできた餡が入っています。

これは何ですかと尋ねると「あんまんだよ」と言ってさらに2つ程くれました、作り方を聞いたのですが材料が足りないから待つてくれと言われたので今度一緒に作る約束をしました。

その後「この時代に砂糖はまだなかったからなあ」
南蛮でネコミミ娘たちと交渉してサトウキビを買い占めて・・・
と何かあくどい顔をして画策しているのを見かけました。

また次の日には違うものを作って食べさせてくれました。確か「ドーナツ」とか言う穴の開いた饅頭みたいなもので、生地がとても美味しかったので作ってくれた分全てを食べてしまいました。

あとは小麦を練って作ったパンというものの作り方を教えてくれ、今では一緒に邑の中で売ったり商人と契約して違う邑に売ったりしています。

確か儲けは8対2だとすごい悪そうな顔で商人さんを脅していました。今度商人さんと一緒に南蛮に行くらしいです。一緒に行きたかったのですが、さすがに駄目だと言われました。

少しいやらしい顔をしていたのがとても気になります。

パンの売上金で空海さんはとてもお金持ちになっていましたが、あんまり持っても困るからと半分以上私たちにくれました。

最初は断っていたんですが、命のお礼に比べたらまだ安いとしくしく渡してくるのでつい受けとってしまいました。

多分そこらへんの役人よりは持っていると思います。

空海さん自分のお金でこの邑に警備隊を雇っていました。

さらにパンの売上でパンを作るため専用の家を建てて何人かの邑の人に作り方を教えて、その中で作らせていました。

賃金がとてもいいので働きたいという邑の人がいっぱいいましたが、さすがに全員は雇えないのでパン専用の商人として邑の外に送りだしていました。

この時点で邑の外から色々な人が移り住んで来たりしてかなり大きい邑になるうとしていました。

ある日邑の役人が税を納めるように言ってきましたが、なんといつもの30倍近くに跳ね上がっています。邑の人は文句を言っていました。空海さんは笑顔で役人の上の人に会ってくると言ってお出掛けしていききました。

帰ってきたときにはとてもいい笑顔浮かべていて、税もいつもに戻って……いやいつもより安くなっていました。

なんか黒い笑顔を浮かべて桃色の鎖を振り回していました。

噂では役人の上の人の家から「鎖がーっ!!鎖がーっ!!ひい助けてくれえ!!」という声がよなよな聞こえるらしいです。

一体何をしてきたのかとても気になります。

そしてさらにお金をたくさん得て邑に警備隊を増やしていました。

何回か賊に襲われそうになったこともありませんが、空海さんと毘の警備隊で全員追い払っていました。

警備隊曰く「空海の旦那がいれば俺たちはいらぬ気がする」と言っていました。

ちなみに警備隊の訓練は空海さんがやっているらしく、警備隊の訓練所からは悲鳴が絶えないそうです。

警備隊の皆さんが空海さんを「鬼の空海」と呼んでいたのを空海さんは聞いたらしく落ち込んでいたのですが、私たちからしたら「仏の空海」ですよというところに落ち込み

「どこの烈火の炎だよ」とかよく分からないことを言っていました。

そしてある日急に空海さんは毘を出ていくと私に言いました。私は嫌だったので泣きついてお願いしたのですが、空海さんは目を逸らして滝のような汗を流しながら頷いてくれませんでした。

空海さんはまだ世界を見て回りたくらしく、ここに留まり続けては

いられないと言っています。

また会うことを約束して、真名を交換しました。

そして兄様と呼んでいいかと聞くと、「北郷くんの代わりみたいで嫌だな」と言いながらも了承してくれました。

こうして私と兄様は一旦別れました。

けどまた会えると信じています・・・だって兄様は約束してくれたんだから

きっとまた会えますよね？兄様

《続く》

15話という名の流琉の空海観察日記！（後書き）

××（作者、以降×と表記）「作者と」
葉「葉の」

タブル「対談コーナーっ！！」

×「いやようやく始まりましたね対談コーナー。それはともかくお楽しみいただけただけでしょう？」

出会うてすぐなのにもうお別れになった典章ちゃん。

典章ちゃんの可愛さについてただひたすら書くことかと思っただんですが原作が進まなすぎなので典章ちゃんとの生活はこのような形で省略させていただきました。まじすいません！！」

葉「というか基本的に行き当たりばったりで書いているあなたがいけないんじゃないのかしら？そのせいで更新遅いし」

×「ええ確かにかなり思いつきで書いている場面がありますね。ただ思い付くとその場で調べてから書くんで時間がかかるんですよ・
・（遠い目）」

葉「という言い訳でしょう？この前友達と一緒に小さな子供と並んでガンバライドをやってるのを目撃されてるわよ。さらに近くの中古ショップで嬉々として古い仮面ライダーの人形を探し回っているのも

「ファイズーッ！」「とか叫んでたらしいわね？」

×「うぐっ・・・」

葉「それにぶっちゃけ美花殺したのその場のノリのような気がするのだけれど？」

×「Hahaha（滝汗）にやにをおっしやるのやら、確かに美花ちゃんを生かして空海くんの娘として生かす設定も考えましたが・・・オリキャラを生かすすぎると原作とのキャラの絡みがめんどいんだよ（ボソッ）」

葉「面倒だからって人の娘殺すなっ！！」

×「ちよっそこはそんな棒入らなっ・・・アッー！！」

作者悶絶中

葉「ふう悪は滅びたわ・・・次回は復活鞠義と鞠礼の特集よ」

×「いや・・・無理だから・・・というか次回はネコミミ娘たちだし・・・葉さんにはネコミミあわな・・・あっちよっヤメテーっ
!?!」

葉「次回もお楽しみに〜?」

16話：南蛮省略以下同文（前書き）

お久しぶりです

アンチ許緒ちゃん

わりと酷いです
そしてシリアス

誤字脱字は報告お願いします

16話：南蛮省略以下同文

やあ空海さんだよ

今流琉ちゃんの邑を出て南蛮でネコミミ娘たちとサトウキビの買い付け交渉をしてきたところさ

ちなみにネコミミ娘たちを見てつい後ろに回って抱きしめたのは若気の至りってやつだね！！

ネコミミ娘たちはパンをあげるとあっさり交渉に応じて砂糖を使っ
てつくったお菓子を毎日少しずつ送ることでサトウキビをくれました。
た。

今ではお友達です、ナデナデしてもなんら文句は言われません
食べ物に弱すぎるだろあの娘たち

ちょっと心配なお父さんです

友好の証としてネコミミと尻尾をもらったんだけど扱いに困る

つける相手がいないからなあ

「また来るにや雅人！」

「また来るにやー」

「また来るによだー」

「にやー」

なんか真名まで交換した

美以ちゃんに

トラ・ミケ・シヤム

だつてさ

ええもちろん餌付けしました

本格的にお父さんは心配です

決してロリコンなわけではない！！

今は南蛮を離れ男二人旅の途中なのですから

「旦那次はどこにいくんですかい？」

今話しかけてきたのは傾宣、真名は晶

生粹の野郎である・・・髭なんか生やしやがって

元々商人をして色々なところを回っていたのでその経験を使ってパ
ンを各地に売らせている。

まあ今は僕と一緒にブラブラと馬車で旅をしてるけど

「まだ決めてないんだよね〜なんか行きたいとことかある?」

「ああ〜なら俺の生まれ故郷とかはどうですかい?わりと近いんで、
いいと思いますぜ」

まあ行くあてもないし気ままに行こうかな

「ならそこに行こうか」

「へい」

そうして僕と晶は晶の生まれ故郷の邑に向かった。

あまり大きな邑ではなく農家があつまった邑なので期待はするなど
晶が言っていたが

別に休めればなんでもいいのだ。

で邑につくと許緒ちゃんがいきました。

うわぁなんだろうこの不自然な偶然は・・・絶対意図されたものだろ

あの壁面駄神の仕込みだろ

芸能人がたまたま通過したとかいうテレビ番組ぐらいやらせだな

関わって変なフラグを立てたくなかったのであまり近づかないようにした・・・いやだって晶のやつが許緒ちゃんと知り合いとかなおさら怪しいから!!

などと警戒していると・・・

「黄巾だーっ!!黄巾がやってきたぞーっ!!」

賊というかようやく現れた黄巾が襲ってきたらしい

・・・よつやくだな本当に

巻き込まれるのは嫌なので近寄ってきた黄巾たちを柔道と合気道を利用してテキトウにあしらっていると・・・何故か僕が先頭になっている。あれえ？

戦わない邑の人たちは全員僕の後ろに入って隠れている・・・ずつつ！！

特に腹立つのが僕の後ろでやる気なさそうな顔をして鼻糞を掘っている晶

たまに矢を射って賊の手足を撃ち抜いてるけど・・・欠伸とかしながらだからムカつく

「なあ晶・・・前衛と後衛を交換しよう」

「断固拒否しやす」

「よし黄巾の前にお前を潰す」

「ふつあめえですよ旦那」

いつまでも勝てると思ったら大間違いでさあ」

僕と晶が火花を散らして睨みあっていると、僕らの間を巨大な鎖の付いた鉄槌が通過した・・・笑えない速度だった。

「二人とも喧嘩してないで真面目に戦ってよ!!」

「はいっ!!」

しょうがないので四次元コートから紫色の鎖《触れることなき鈍鎖》を取り出し黄巾たちに向かって振るう。

先頭の奴にぶつかりその衝撃で後ろの何人かも巻き添えをくいボーリング状態になっている。

何回か振るって多少人数が減ってきたのでいつもの銀色の鎖に変える。

ちなみに今のところ僕は死者を出していない・・・墓標が立った感じがないからな
死にかけならいるかもしれないが

まあそれは御愛敬ってやつだ。

近場にいる気絶した黄巾たちを鎖で縛りつつ、まだ戦っているやつらを鎖でぶつたたき気絶させ縛る・・・面倒くさいなあ

まあ所詮偽善だけど殺したくないし・・・しょうがないのかね？

でようやく撃退し、捕まえた捕虜たちを集め回っていると・・・

「ギヤアアアーツ!!」

野郎の悲鳴が聞こえた・・・限りなく聞き苦しいものなので無視するか迷ったが一応行ってみると

生き残った黄巾たちの前で返り血で血まみれになった許緒が立って

いる・・・血まみれになった武器を持ったまま

そしてその前には死体が転がっている・・・なるほど

捕虜たちはビクビクと怯えた目で許緒ちゃんを見ているから間違いない

・・・許緒ちゃんが捕虜を殺したな

武器を再び振り上げた許緒ちゃんを見て鎖を投擲し許緒ちゃんの武器を吹き飛ばす。

「っ！！何をするんだよ!？」

「どうして殺す必要がある？」

武器を吹き飛ばしたのが僕だと分かり睨んで来る許緒ちゃんと捕虜の間に入り、許緒ちゃんを捕虜たちから遠ざける。

「そいつらは色々な邑を襲って人を殺し回っているやつらだよ!？
そんな奴ら殺さなきゃ駄目だっ!！」

許緒ちゃんが怒りを込めた声色で僕を怒鳴ってくるが・・・正直ど
うでもいい

「君も人殺しだけど、自殺しないのかい？」

僕は嫌らしげな笑みをニタニタと浮かべて尋ねる

「っ・・・そいつらは人じゃない!！」

「はっ何をおっしゃるウサギさん。こいつらは人間だよ」

「人間が同じ人間を殺すわけないだろ!!そいつらは人間じゃない
んだっ!！」

「ちっ・・・餓鬼がなめたこと吐かしやがって」

「なっ!？」

僕にとって今の台詞は絶対に許せないものだ

「何が人間じゃねえだ。ただでめえが人殺しだつて罪悪感から逃げ
てえだけの方便じゃねえか」

「なっボクはみんなを苦しめるやつらために正義の「軽々しく正義
とか吐かしてんじゃねえぞクソガキがつ!!」あつ……………」

僕と許緒の言い争いを聞き付け晶が駆け付けてくる。

「待つてください旦那っ!!季衣は小さな頃賊に両親を殺されまし
てそれで……………」

「賊には恨みがあるつてか?」

「ええ」

晶と許緒が俯いて悲しげに話している
…………だからなんだ?

「笑わせんなよ」

「なっ!?!」

「賊に両親を殺されただ?はっお前が憎いのは両親を殺したやつら

なのか？それとも賊なのか？あぁんどつちなんだ？」

「っ！！お前にボクの何が分かる！？」

「分かりたくもねえよ。お前の行為は復讐じゃねえただの八つ当たりだ・・・そんなもの俺は認められねえ」

「お前が認めようがなんだ「季衣っ！！」でもおじさん「季衣」・・・」

許緒は僕を睨みつけながらも走っていく

「・・・旦那・・・すいませんでした。まだ理解してないんです・・・
・教えなかった俺達がいけないんっすけど」

「・・・いやもういい」

僕は周りを見回す・・・そこには子供に頼ってなんなら戦おうとしないクソツタレどもがいる。

あんなガキが傷だらけになっているのに何もしようとしなない奴らが

いる

・・・こんな中にいたらあのガキもあんなになっちまうか

僕は完遂者として許緒の行動を赦すわけにはいかない・・・復讐な
ら止めようがないが
あれは八つ当たりだ

八つ当たりで正義を語るクズだ

そしてそれを当たり前のように見ている周り

ふざけんなよ!!

お前らが止めないで誰が止めるんだよ!!

ああ胸糞悪い

《続く》

16話：南蛮省略以下同文（後書き）

ああ更新遅くてすみません

許緒ちゃんはどうやって絡むか迷って
結局最悪な結果にorz

というか僕が一番嫌いなのは
子供を戦わせている邑の人たちです

なんなんでしょうかね彼らは？

やる気になればいくらだって対策をとれると思うんですが
それはやはり僕があまちゃんだからこそなのかもしれませんが

次回もお楽しみに

17話・おそろくきつとメイビー（前書き）

更新遅くなってごめんなさいm（）m

なかなか書けなくて

なんかグダグダですがお楽しみいただけたら幸いです

誤字脱字は報告お願いします

17話・おそろくきつとメイビー

邑のやつらに殺意を覚えつつも晶に命じて流琉ちゃんの邑に手紙を出させ

警備隊を何人か寄越すよう頼む

ぶっちゃけこいつらがどうなってもいいが目の前で殺されては気分が悪いから一応の対応である

あんな子供にあんな顔をさせて戦わせて助けようもしないやつらなんか皆殺しにされようがこんなクソツタレどもは本当にどうでもいい

そうして一応邑の長と交渉し小麦を作らせ提供することを代わりに邑の人が生きていける分の食料と盗賊に襲われても大丈夫なよう警備隊を配置させ安全を約束させる。

これでこの村の安全は保障されたわけだ

・・・はあ

ため息がとまらない

ああそつだ長にさらに追加条件として何人か邑の人を戦わせることを約束させた・・・自分たちが子供に何をさせていたかを分らないとな

ちゃんと自分の身で生や死を感じて欲しい

あああと許緒ちゃんを戦わせないことも約束させないとな

やること多いよ全く

晶の家でウダウダと必要な書類を捌きまくり、長に契約書にサインさせ何割の小麦を提供させるかを計算し・・・・・・・・

ようやく終わったころには既に太陽が落ちて再び上がっていた・・・知らない間に徹夜してたorz

畜生まったりとした生活を送るために旅に出たのに（あれ？そつだ

っけ？（僕の平穩なる日々を返せっ！！

ああ頭痛い

もうお酒飲んで寝よう・・・ぐすっ

チクシヨォー！！

僕は声には出さず心のうちで悔しさを叫ぶ

「ぐすっ・・・」

魂の雄叫びをあげているとふと泣き声が聞こえたので、そちらを見ると5歳ぐらいの子供がうずくまって泣いていた・・・

「どうした？」

「・・・お腹が空いた」

ガクッ

そんなことで泣くなよ！

親が死んじゃったとか思っただろ！

「作ってやるからこっちこい」

子供を引き連れ晶の家の厨房を借りて料理を作りはじめる

材料は四次元コートにたくさん入ってるからな

よしハンバーグでも作ってやるか！

そしてカチャカチャトントンやって出来たハンバーグを子供の前に置くと

「・・・食べていいの？」

何故か食べていいかを尋ねて来る・・・ああそうかこの時代は食糧
まともにとれない時代だからな

子供ですら躊躇いがあるのかよ

「子供は出された料理にがつづけばいいんだよ」

そう言って子供の頭を乱暴に撫でる

子供は嬉しそうに笑ってガツガツと一心不乱に食べ続けている。

その様子を笑いながら見ているとどこからか視線を感じる・・・視線の元凶を見極めるために辺りを見回すと匂いにつられてやってきた子供たちが窓の外からこちらを見ていた・・・はあ

「全員入ってきなよ。おいしいもの食べさせてあげるからさ」

窓の外の子供を部屋に入れ色々な料理を作ってる

子供たちは笑いながら互いの料理を交換し美味しい美味しいと連呼し、さらに笑顔を深める。

やっぱり子供は笑ってなきやな

そして匂いにつられて子供たちがさらに集まる。

まあ食糧は多量にあるから作ってやるか・・・なんか食堂のおばちゃんみたいだな

料理を作り続け子供たちに振る舞い続ける

夢中になってやっている内に気づく・・・邑の人のほとんどが食べに来てるorz

クソツタレどもまで食べに来やがって

追い出したいが子供の手前乱暴なことは出来ない・・・くっお人よしめっ

なんかまじでどんどん食堂みたいになってるよ！
おいそのの！注文をとるんじゃないっ！！

ハンバーグ10人前？誰だそんな量頼んだ馬鹿はっ！！

「ガツガツ！！モグモグおかわりまだ〜？」

許緒ちゃんだった・・・おい

一時料理を作るのを中断し許緒の前に立つ

「おい！！君は僕のこと嫌いなんじゃなかったのか？」

「・・・兄ちゃん自体は好きじゃないけど兄ちゃんの料理は好きなの！！」

なんとという屁理屈っ！

「ああまあいいや」

「早くおかわりちょうだいっ！！」

「分かったからうるさくしないの」

頭をかきながら厨房に戻り、料理を作り続ける

でだいたいの人の料理を作り終え

いまだに料理を食ってる許緒ちゃんの前に座る

「おいしいかい？」

「うん！」

俺の言葉に笑顔で返答してくる許緒ちゃん、まったく昨日はあんなに敵意を向けてきたっていうのに・・・はあ

「周りを見てごらん」

「ん？」

許緒ちゃんは食べ物にくわえながら周りを見回す、そこには料理を食べながら笑顔で笑いあっている子供や邑の人たちがいる。

「？」

「周りの子供たちの笑顔を見て何か思わない？」

「うん、楽しそう？」

「楽しそうか、まあ表現が足りない気もしなくはないけど」

「そうだね、子供たちには笑顔が似合うと思わない？」

「うん、楽しいのが一番だね！」

「それは許緒ちゃんにも言えることじゃないのかな？」

「えっ？」

「許緒ちゃんにだって笑顔が一番なんだ。なのに君は今みたいに楽しそうな顔はしないで辛そうな顔で盗賊を殺している」

「……………」

許緒ちゃんは俺の言葉に手を止めて俯く

「それは一番なのかな？」

「…………それは」

「昨日は僕も言い過ぎたよ、ごめんね」

ちよつと昨日は気が立っちゃって冷静な判断が出来なくなってたし

「…………うん、ボクも怒鳴ってごめんなさい。それに…………無駄な人殺しをしてごめんなさい」

許緒ちゃんはそんな俺の言葉に間をあげながらもちゃんと返してくる。

「分かってくれたんだね・・・話を戻すけど君みたいな可愛い女の子が戦うのは決して一番じゃない」

俺は少し語気を強くして許緒ちゃんに言う

「・・・・・・・・。」

「許緒ちゃんが戦わなきゃ戦う人がいなかったかもしれない、けど最初から戦う気がないので話はまた違ってくる」

「・・・・・・・・」

「何人かは戦っていた、けどさ他の人はどうだい？君を助けに来てくれた？」

許緒は俯きながら首を横に振る

「僕が許せないのはそこなんだ」

「えっ？」

許緒は意外そうな顔をして顔をあげる

「確かに昨日僕が言った通り許緒ちゃんが無駄な人殺しをしたことにも怒っているよ？」

「うん」

許緒ちゃんは辛く悲しそうな顔をしながらもちゃんと頷く

「それよりもなお許せないのが君にそれがいけないことだと教えなかった人たちだ」

僕は許緒の頭に手を乗せ撫でながら許緒に語りかける

「君は子供なんだ当たり前のように間違える。それを正すのが大人なのに・・・この大人はそれをしなかった。

僕はそれが許せないんだ」

「お兄ちゃん……」

「だから一緒に戦おう」

「えっ？」

「君の周りに君を正してあげる人がいないなら僕が正してあげる。君の周りに君を守る人がいないなら僕が守ってあげるだからさ、あんな辛そうな顔で戦うのは止めてくれ」

許緒ちゃんの頭を撫でながら僕は誠意を込めて頼む

「……本当に守ってくれるの？」

「僕の名前にかけて約束するよ」

ニッコリと笑いかける

そして一緒に戦うことを約束する代わりに真名を交換したら季衣ち
ゃんは眠ってしまった・・・やれやれ僕もガキだな

あんなに昨日は怒ってたのに

ああどうしようかな本当に・・・

《続く》

17話：おそろくきつとメイビー（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？

久しぶりにこちらを書いたのでキャラの感じがグチャグチャになりましたorz

次回もまったく考えてないのでまた間が空くことになると思います
が勘弁して下さい

次回もお楽しみに？

18話・はおうがあらわれた！(前書き)

更新遅っ!!

笑えないorz

誤字脱字は報告お願いします

18話・はおう が あらわれた！

やあみんな！

みんなのアイドルの空海さんですよ！

季衣ちゃんと約束してから一週間近くこの邑に滞在しているんだけど……おかしなことに賊が攻めてこないんだよね

失敗したらすぐにでももう一回攻めてきそうな脳筋野郎ばっかだったのに……

内心盗賊たちをバカにしつつ、恒例になってしまった空海さんの食堂で料理を作り続ける。あれ以来子供たちにせがまれ渋々作っているうちに恒例化orz

子供にはただで作るけど大人は有料にしました……いい大人が毎日夕飯にありつこうなんてふざけた考えしてんなよ？などと笑顔で脅したんだけどね

警備隊も来て、邑から何人か徴兵し、麦の育て方も教えたからもうこの邑ですることないんだよね

そろそろ移動したいんだが……季衣ちゃんがない

まあうる覚えながらあのイベントが近々発生すると思われるから、それまで待つことにした……で今現在

不意に攻めてきた賊と交戦中

ざっと500人ぐらい
うん面倒

この前攻めてきた黄巾とは違ったの賊のだった……黄巾は諦めたのか？などと甘いことを考えつつ鎖で敵を倒していく

地面を這うように鎖を投擲し一番近くにいた賊の足に巻き付け、その賊を鎖で繋いだまま振り回し周りの敵を吹き飛ばしていく

若干面倒になってきたな、神宝でも使うか？

楽しようと四次元コートに手を突っ込んだ瞬間、遠くから馬が走る音が聞こえた。

援軍かと思いきってそちらを見据えると、長い黒髪を風でなびかせチャイナドレスのような服をきた大剣をもった女の人が馬に乗ってかけてくる……夏侯惇か

後ろには夏侯惇に続くように兵士たちが走っていた。

夏侯惇が来たってことはイベント発生だな、そう思い四次元コートに突っ込んでいた手を引っ込め普通の鎖で近寄ってきた賊を打ち払いつつどんどん後退していく

……最前線にいたら逃げられないからね

この隙に便乗してこの邑から季衣ちゃんに内緒で出てしまうつもりなのだ

季衣ちゃんには悪いが曹操は近くで見たくない、遠目で確認するぐらいが一番である………なんか嫌な予感もするし

ということでもまだに戦っている晶に話しかけ馬車の用意をさせる………もうそろそろ終わりそうだし丁度いいだろう

「旦那用意ができたぜ」

「なら急ごう。まだレベル3ぐらいの僕がラスボスと遭遇して勝てるわけがないからな」

などと自嘲して馬車に乗り込む………そして戦闘が終わったのか金属がぶつかり合う音がしなくなったので馬車を出させる。

でもまあ僕の人生はそううまくは出来てないわけで………

「怪しいものを捕まえてまいりました」

曹操とは別行動をしていた夏侯淵さんに捕まりましたorz

確かに馬車で急ぎ足で逃げようとしてたら怪しいよね

もちろん抵抗しないで潔く捕まりました。

で曹操様のところに連れて行かれると

すでに季衣ちゃんが夏侯惇に襲い掛かり、曹操様は季衣ちゃんに謝り、力を貸して欲しいと頼んだようで……ん？でもなんで硬直してたんだ？

「あれが貴方の言っていた男かしら？」

「はい華林様！」

ジロジロと品定めをするような目つきでなめ回すように見られる・・・
・・・どんな余計なこと言ったの季衣ちゃん？

季衣ちゃんはとてもいい笑顔を浮かべている・・・
んな笑顔で見ないで！！

「初めまして曹操様！ワタクシは傾宣でゲス、こちらが許緒殿の言
っていた空海の旦那でゲス！！」

「ちよつだり「危ないっ！！」ガハッ！？」

とりあえず下手に出ながら晶を売ることにする。僕の言葉に慌てて
訂正しようとする晶・・・もちろんすぐに右フックを腹にぶち込み黙
らせた。

「ふう虫が止まっていたでゲス」

「「「……………」」」

僕の行動をジト目で見てくる三対の視線……………やべえ晶の野郎め

「で曹操様は空海の旦那に何の御用でゲスか？」

手をもみながらめちゃくちゃ下手に出て聞いていく

「この許緒が仲間になるのであれば是非一緒に仲間になりたい男がいると言うので見てみれば……………」

「失礼ながらこの空海の旦那は歴戦の猛者でゲス。一騎当千の武将さらに頭もキれるお買い得な人でゲス……………どうぞこの空海の旦那をよろしくお願いしますでゲス」

晶を指差しながら自画自賛しつつ晶を売る……………すまん晶、君の犠牲は忘れないよ（笑）

季衣ちゃんなんか困惑して僕と晶を交互に見ているけど余計なこと言わないでね

「ええその男は使えそうだけど・・・貴方はどうかしら？」

目に鋭い光を宿し狩人のような目つきで見てる。

「あつしはただしが無いデッチでゲス、そんな「あらその割には強そうね」冗談は止めてください、100人中99人に雑魚と間違われるモヤシボディーなのに」

つい真面目に返してしまうほどしょうもないことを言われた・・・
・・・今までどんだけ雑魚扱いされたか（泣

「あらそう、なら・・・・・・春蘭、秋蘭」

「はっ」

曹操は何を思ったか夏侯惇と夏侯淵を呼びだし何か耳打ちをしている、そして・・・

「やりなさい」

「御意」

ヒュッ

「危なっ！」

曹操の命令とともに夏侯惇は僕に向かって躊躇わずに大剣を振り下ろしてきた。

僕はそれに間一髪で気づき紙一重でかわした・・・かわしてしまった

「あら武人でもない貴方によくあれがかわせたわね」

「たまたまでゲスよ」

「秋蘭」

「はっ」

ピュッ

「そおい!？」

今度は夏侯淵が命令と共に矢を3本も顔面に放ってきた。

そしてそれをまたかわしてしまった僕orz

やっちゃまったYO

「あらまたかわしたわね」

とてもいい笑顔で話し掛けてくるDOS霸王・・・・・・・・人を虐める
ときは随分とまたいい笑顔を浮かべるね

「ぐっ」

さすがに言い逃れが出来ずつまる。

「で貴方が空海かしら？」

しよがないので正体を明かすことにした。

「・・・はあそつだ。僕が姓は空、名は海、字は戯児、気安く空海にゃんと呼んでくれ！！さん、はいっ！」

ヒュッ

「首をはねるわよ？」

「危なっ！！鎌を振るってからそついうこと言うのやめてくれません！？」

「かわせたのだからいいでしょう？にしまも貴方私をナメているのかしら」

「そんな曹操様のようなツルペ」殺すわよ？「危なっ！？」

完全に殺す気で鎌を振ってきやがったよこのドS霸王!!

「……まあいいわ。貴方私の所に仕え」「すみません」……なら
客将としてはどうかしら？」

今度断つたら殺すぞと言わんばかりに首に鎌を当てて聞いてくる……
……人はそれを脅迫という

「ウケタマワリマシタ」

冷や汗を垂らしながら壊れたからくり人形のように首を縦に振りつ
づける。

こうして僕の魏での生活が始まった。

《続く》

18話・はおう が あらわれ た！（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

遅くなってすみません

というのも違う作品のをがんばり過ぎてこちらを蔑ろにしていただけなのですが

まあネタが浮かばなかったのも大きいですね

次回もいつ更新出来るかは分かりませんが

次回もお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7067/>

真・恋姫†無双 ~縛られた完遂者~

2010年10月10日17時20分発行